

505

56



始





505  
56

支那風物叢書  
第一篇

中野江漢著

北京繁昌記

第一卷

發行所 支那風物研究會



175-56



支那風物叢書第一篇

北京繁昌記

——(卷一第)——

中野江漢著

著者寄贈本

支那 \* 北京

支那風物硏究會

大正  
11.8.19  
寄贈



支那風物研究會の趣意

支那を見る日本人は、必ずその最後に「支那は不可解なり」と断定して其目を閉ぢるの憾みがある。これは觀者が、日本の尺度を以て支那の大を計らんとし、或は暗中に明を探らんとする梟の如き目を見張るからである。若し支那尺を以て計り、明中に明を探ぐる尋常の眼を以て見たならば、支那は必らずしも不可解の國ではない。吾徒は在支十數年。尋常の眼にて觀、支那の尺度を以て計り得たるものを蒐めて、これを汎く江湖に曝たんとするものである。若しこれが、觀者のために平凡なる羅針盤たり得れば、この企圖は有意義であると、吾徒は満足する。



支那風物研究會會則

- 一、本會を支那研究に便宜多き北京に置く
- 二、本會は支那の風俗、文物、其他一般社會に關する事項を具體的に研究刊行するを目的とする
- 三、刊行物を「支那風物叢書」と題し、一般に販賣すると共に贊助員並に會員に頒布する
- 四、「支那風物叢書」は大概毎月一回、五日を發行期とし百二十頁以上とする
- 五、贊助員は會費其他を以て本會の舉を翼賛し、會員は毎月叢書代銀一弗（日本は金壹圓）を負擔するものとする

自序

大正四年の秋、初めて北京に來た私が、劈頭に困つたのは、北京を知る正確にして且つ詳細な邦文の指南書が無かつたことである。己むを得ず之を北京通に問ふて見たが、これ亦十分で無かつた。今度は歐米人の著述を覗いて見たが、建築又は宗教等以外に特に信すべきものが無かつた。結局支那人自身の著述に據るの外は、なく、圖書館や古本屋を漁つて見ると、北京に關する著述の多いのに驚かされた。恰も暗夜に燈火を得たやう



な喜びを以て、私は一年有餘を費して之を讀破し、机上の北京研究を了つた。

儲てこの研究を基礎として、實際上北京の事物に當つて見ると、二三欽定書を除くの外は、徒らに故實を羅列したのみで、吾々が知らんと欲する點に觸れず、案外信を置くに足らぬことに氣附いた。而も之等の多くは前清の著述で、現代北京とは殆んど没交渉であることを發見した。ここまで漕ぎつけて見た私は、尙一歩進んで、文獻と現實とを併せて「北京の研究」を完成して見やうと決心した。爾來七年、足と頭と筆とで書いた努力の

結晶が、即ちこの「北京繁昌記」である。

然し茲に斷つて置きたいのは、私は學者でもなければ、亦學者を氣取るものでもない。深くなくとも廣く世事に當るをモットーとする新聞記者である。世の學者が、一日の批判を怖れて、ややもすれば百年の研究を腐らせて了ふのとは違つて、吾徒の研究は今日の事を今日の裁判にかけて、廣く世の是非に問ふところに新なる生命があると信ずる。「北京繁昌記」一篇の提供も亦此意味に外ならぬのである。

従つて本書は必ずしも完璧を誇る譯ではない。此書



を携へて現場に臨む讀者によつて、判決を下さるれば著者は喜んで斷頭臺に登る勇氣はある。斯くて此叱正によつて復活し、遂に日本人の北京研究が完成されるものであると思ふ。

本書の編輯に就ては、佐藤贍齋、山川般谷、橘朴庵、鷺澤南洋諸氏から多大の指教と援助を蒙つた、本篇の研究にして多少の學界に裨益する所ありとせば、是れ全く四先輩の賜である。其他發行に關しては華北正報社尾崎正文氏、印刷には同社牧野源一氏の友情に負ふことが多かつた。今此小篇を出版するに當り、前記諸氏に對し謹んで感謝の意を表する。

大正十一年八月一日孟夏の北京に於て

中野江漢識

## 原序

大正八年二月十四日京津日日新聞に「北津繁昌記」と題し掲載したる原序文

今は昔、晋の左太冲が三都の賦を作つた時は、白米一升金五十錢也などといふ瘦浪人の肝胆を寒からしむる生活難の時代でなかつた事は、シミツタレな三都を賦するにアタラ光陰を三ヶ年丸潰にしたのみか、豚饅頭のおくびをしなから、庭の隅から雪隠の壁にまでぶら下げ置いた筆紙をとりて、今日は一句、明日は一語とチグハグに縫合せたつゞれの錦に沁みじみと吞氣さ加減を傳へてゐる。然も先生は大得意の獅子鼻をうごめかし、斯界の先進たる楊雄や、班固、張衡の輩を貶し、彼等は法螺を通り越して虚構文學の開山なり、蜜柑が眞夏に成熟するの、比目魚が泉水に游泳するの、海坊主が昆明池に出没するのと、品にこそよれ虚構もこゝまで眞實しやかに書立てらるれば吾人は諸大家の文學上に於けるアピリターを疑ふといつたやうな事をくどくどしくも自賛してゐる。さらば夫子自身の物したまひし三都の賦は、其價值如何と顧みるに、



その大半は雪隠文學の成の果で、その使用せる文字こそ支那式に之を形容すれば、珠璣滿幅光彩陸離とも稱すべきであらうが、謂はば一種の「三都繁昌記」に過ぎぬのである。しかもその繁昌記たるや、物移り星換はつた一百年後の想像であつて、左思ご自身が當時の美姬にラブされた艶福もなければ、當時の御馳走に二日酔した歴史もない、それで先生三ケ年も雪隠にしがみつゝ瞑想思索して、萬古の長篇大作をヒリ出したのだから、太低その昔の米相場にも相當がつくのである。自分はこれから毎日、ゑつて書かうと思ふ「京津繁昌記」は即ち現在の繁昌記であつて、讀者諸君と朝に夕に之と接觸しつゝある眞實正銘の見聞記である。無論海坊主が北海から出沒したり、比目魚が大和公園に游泳したりするやうな虚構はない、さりとして雪隠でイキミ出したやうな固くるしい怪しげな材料で無いことも讀まれる人には直ぐ知れるであらう。世智辛い今日に、かく呑氣なる閑文字を弄するやうであるが、ソコにはマタ一種の深き意氣が存在してゐると共に、この閑文字を草する裏面には無駄骨ながら、私の非常な努力も潜在してゐるが、ソレハ讀者諸君の御亮察に一任して置く。

## 凡例

- 一、北京の一事物に就て研究した結果は、之を其都度「京津日日新聞」に發表して世に問ふた。其書はそれを補遺増訂したものである。
- 一、「北京繁昌記」は京津日日新聞に掲載せる分にも二百八十六回に及び、此小冊子にすれば十卷以上に上る、尙増補して結局十五卷位に纏めるつもりである。
- 一、初め北京沿革より筆を起し、秩序的に記述するつもりであつたが、それには尙時日を要するので、先づ斷片的なものを發表し、徐々完成を期することとした。
- 一、本篇は大正八年の春筆を執つたものを主として蒐めたが、本年の七月十日前後に親しく現場に臨み、更に研究を加へたので舊稿とは全然異つて居る。
- 一、記述の方法は、本書を携へて現場に臨んで研究する人の参考となるやうにした。
- 一、考證は煩冗の嫌あれども、務めて詳述した。支那には稀らくもない聯額の如きも一々之を掲載するはどうかと思つたが、北京を知らぬ人の爲めにもと掲げて置いた。



- 一、里程、尺度、重量等は悉く支那制度を用ひた。
- 一、参考となるべき正確なる書籍よりは、直譯又は全文を引用した。
- 一、北京に關する参考書の解説は目下執筆中であるから、北京研究の方法、北京年表、と共に出來得べくは第二卷に發表する。
- 一、卷頭の歡喜佛は從來公表されたことはないと思ふ。著者親ら雍和宮の許可を得て撮影し、學術參考品として掲載して差支なしと其筋の許可を得たもので珍とすべきである。
- 一、北京の地圖が載せたかつたが、印刷が間に合はず次に譲ることとした。
- 一、體裁其他に就ては印刷を急いだ爲めに不本意な點が多いが第二編より徐々と改全する。

目次

### 北京繁昌記(第一卷)目次

- 一、景 山……………一
  - 孔雀東南飛……………玉樹後廷歌……………支那の情死……………男同志の心中……………明末の大患……………李自成……………毅宗の經死……………思陵痛……………萬歲山……………煤山……………炭海……………北京の色彩……………山上より俯瞰……………幽燕の形勢……………洛陽名園記……………衣襟の遺詔……………日本兵の俗語……………
- 二、數字の城壁……………六
  - 歴史の潮流……………城壁の雄大……………數字の解剖……………現在の北京……………内城……………角樓……………月城……………箭樓水關……………城樓……………變遷の跡……………
- 三、丁鈴、丁當……………九
  - 北京と駱駝……………道傍の怪物……………漢の張蹇……………黄河の探檢……………歐州の交通……………成吉思汗の遠征……………沙漠の舟……………翁仲……………銅駝……………
- 四、文天祥祠……………一一
  - 正氣の歌……………宋末の忠臣……………授命の遺跡……………柴市口……………雲慶將軍斷碑……………遺像碑……………衣帶の銘……………



文山と大石義雄……泉岳寺と比較……丞相楡……杜甫と武侯詞……西台勸哭記……  
五、謝疊山祠……一六

文章軌範著者……貧民借本處……薇馨堂……伯夷叔齊……曹娥碑文……絶食憤死……邯鄲諱  
王羲之……絶妙好辭……天下一品の隱語……忠孝の二大美譚……

六、松筠庵……二〇

楊椒山……宰相嚴嵩……十大罪五奸……菜市口……御製表忠論……忠愍の諫草……代夫乞死之  
疏……諫草亭……康有爲……萬言之書……椒山の眞筆……蜻蛇の膽……絶命の詩……

七、七間樓……二五

丞相胡同……清の和珅……後世の物笑……通州の遺跡……淫壽……明の張獻注……蛛巢街……  
十目十指の怪物……李東陽の諧語……鈴山堂文集……嚴嵩擁護黨……宮闈の遺筆……六必居……  
天下第一關……怡園……

八、墨盒兒……二八

北京の土産……翠翡……支那の三名物……南昌の竹細工……湖南の刺繡……北京の墨盒兒……  
明末の流行……漢口の白銅……水煙袋……墨汁……墨池の製法……

九、偽物屋……三〇

骨董國の首府……書畫の偽物……紙と肉色……雙鉤填墨……端方と梅道人……畫の色揚……偽  
物鑑定法……乾隆御覽之寶……寶物秘法……端溪の鳩眼……鼈の小便……六朝の古瓦……銅器  
の古蹟……張之洞と古鼎……石刻と書物……

十、雍和宮（喇嘛廟）……三三

外藩懷柔策の遺物……雍和宮の起原……清朝の藏蒙懷柔……其道筋と雍和宮碑……天王殿と大  
石碑……轉輪……溫度孫殿……雍和宮……額木奇殿……永佑殿……東配殿……法輪殿……戒壇  
と藥師壇……照佛樓……行宮の燒跡……萬福閣……綏成殿……雅木得克樓……武聖殿……菩薩  
殿……西配殿……札寧阿殿……參呢特殿……大金佛と僧寮……哈達……

十一、歡喜佛……六三

生殖器崇拜……鬼神殿……和合佛解説……魔佛と菩薩……腥氣滿つ……歡喜の相……人獸交る  
滿清秘史……日本の聖天様……歡喜佛の生體……覺禪鈔……十一面觀音の犠牲……生子の佛……  
奇抜な紀念……マスケンピース……ハンテオンの屋瓦……生殖器の彫刻……秘密室の陳列……  
モンキータンプルの彫刻……リンガ……ヨニー……男根と女陰……自在天宮……大理石の陽



根……陽物崇拜……フアリコス……鐵陰錠……問男豫防器……歡喜天……金精明神……塞の神  
 鹽釜明神……太政官禁令……男根祭……天地佛崇拜の理……西藏と佛教……シバ神……幻術……  
 神話……ボン教……習慣を踏襲……忽必烈と喇嘛教……金帝……國師……法王……帝陵發掘……  
 高宗の觸殺……明の西蕃壞柔……西天佛子……平定準部碑……喇嘛は徳の賊……  
 十二喇嘛の奇樂……八〇  
 精力振興藥……興國の淫婦……亡國の妖婦……玉妃……洪承疇……閣中に説く……十男を御す  
 皇太后の降嫁……未曾有の破例……錢謙益の筆……下嫁の詔書……九王の荒淫……子母丸……  
 十三北京の佛像店……八五  
 北京と佛像……佛像店……虎の巻……梵佛の名稱……圖案……顔料……價格……古佛代買……

〔附 録〕

旅行者の爲めに……日本國際觀光局編  
 京奉線……津浦線……山東鐵道……京漢線……京綏線……北支那日本間汽船一覽……

卷 頭

支那風物研究會の趣旨  
 支那風物研究會の會則  
 自序  
 原序  
 凡例  
 挿 畫  
 北京の城壁  
 正陽門と箭樓  
 景山の風致  
 雍和宮とマーニホルロ  
 歡喜佛三體



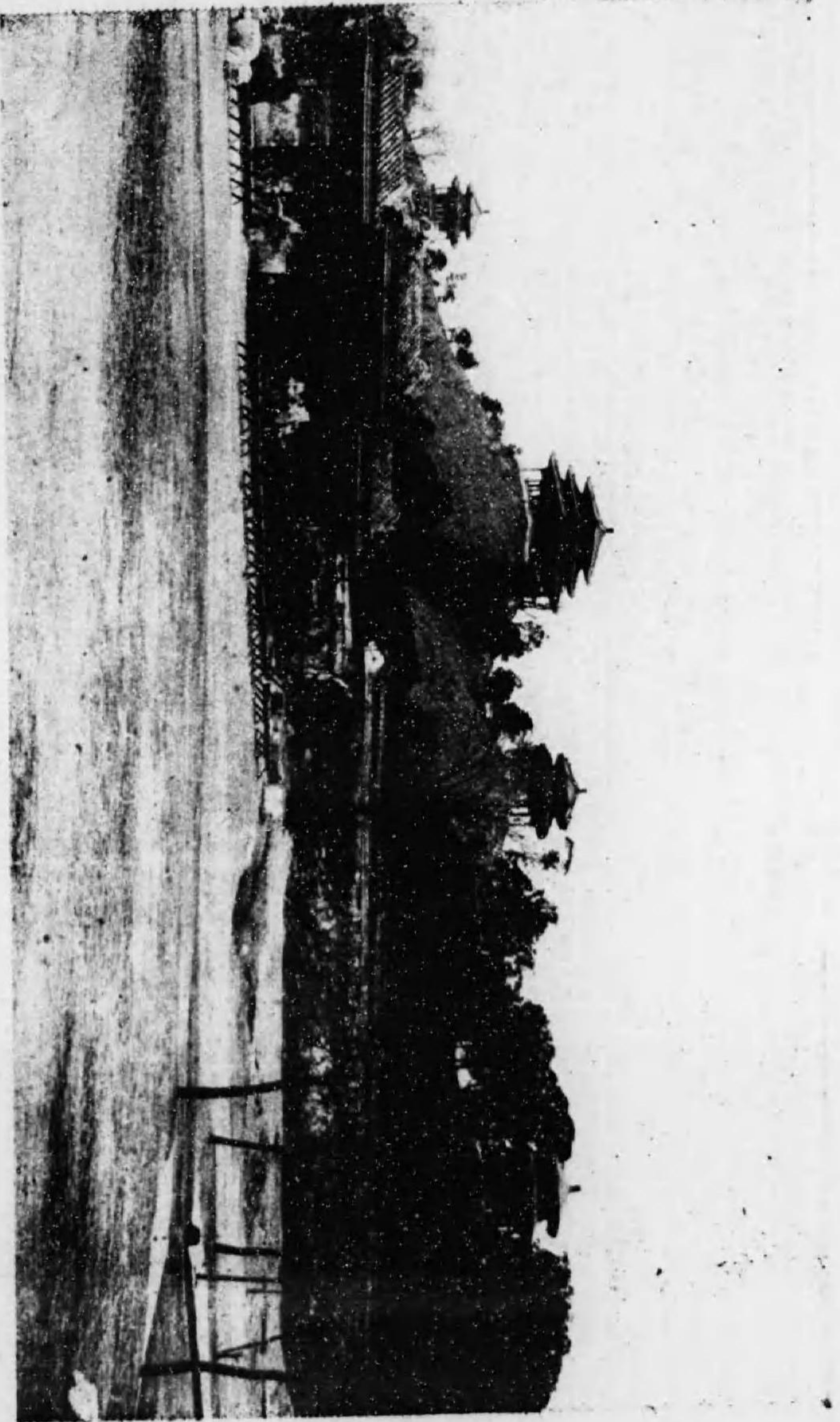


京 北



門 陽 正





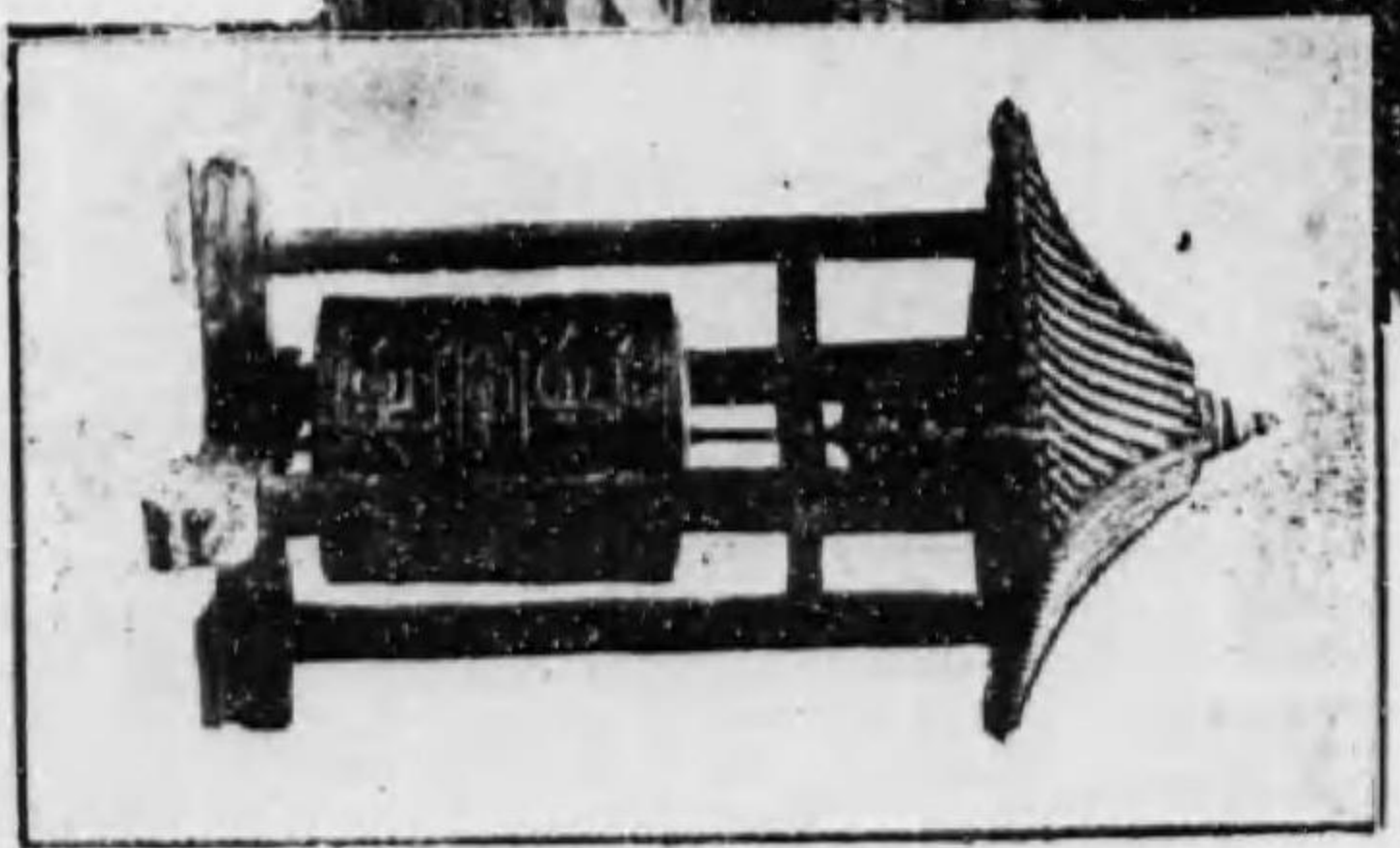
致風の山景







コルホニールと宮和雅



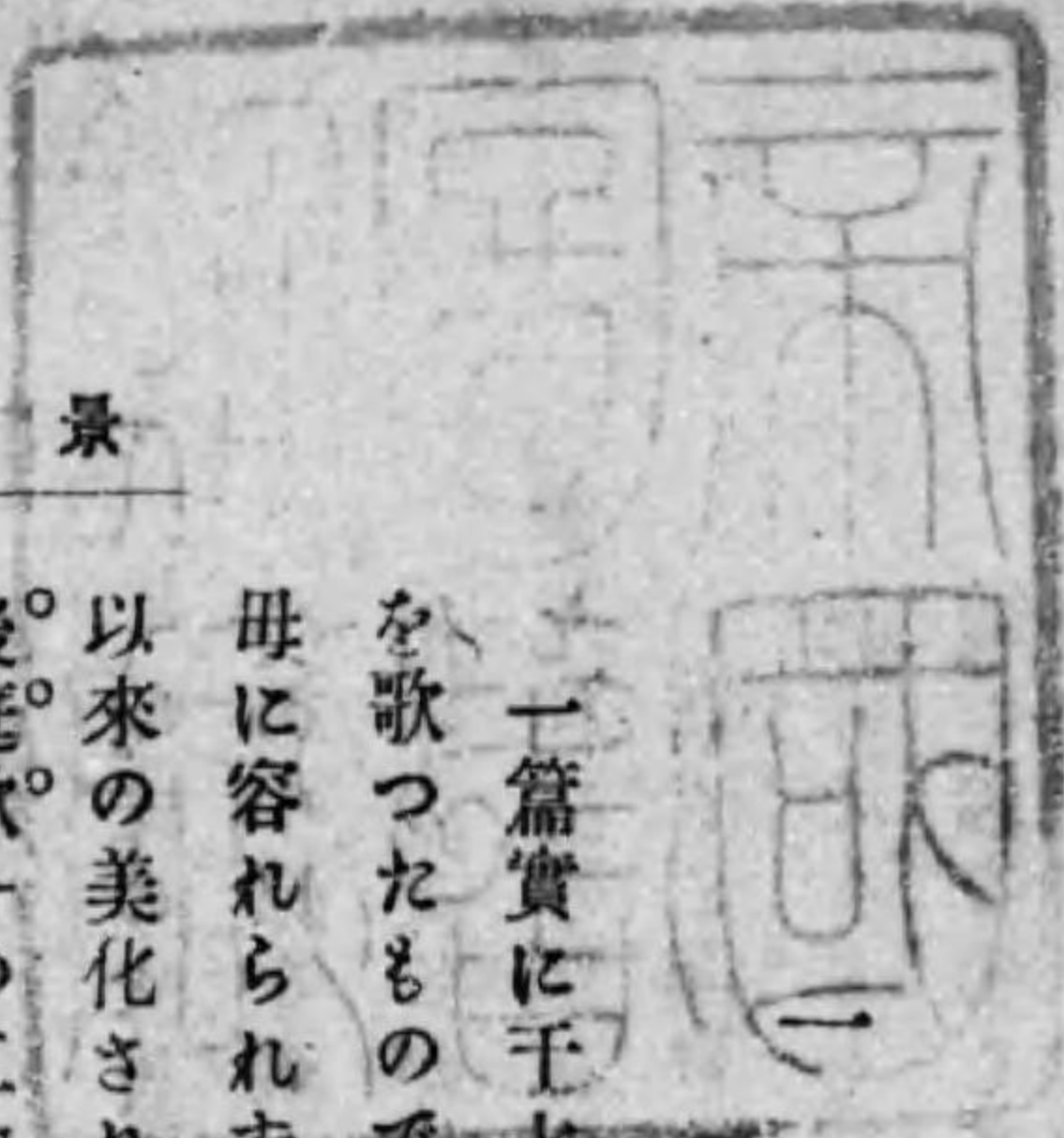


# 北京繁昌記

(第一卷)

中野江漢著

## 景山



一篇實に千七百八十五字、支那第一の長詩「孔雀東南飛」は、漢の焦仲卿夫婦の心中を歌つたものである。仲卿は安徽省廬江府(今の廬江縣)の小吏、その妻劉氏、仲卿の母に容れられず、水に投じて死せるを聞き、庭樹に縊れて其跡を追へるを哀んだ葩經以來の美化された心中物語である。其後、陳が隋に亡された時に起つた「情話」、「玉樹後庭歌」の二曲を作つた陳の後主が、沈后と共に醜脂井に飛び込み、心中の仕損ひをしたことなどはテンデ較べものにならぬ。元來支那には「情死」の文字なく情死の事實はあるが、其多くは日と場所とを違へて死し、日本のそれとは全く趣を異にして

山

景



居る。この意味から明末の惨事、毅宗帝と宦官王承恩の自盡が、若し之を「男同志の心中」とでも認めることが出来るならば、これぞ支那有史以來の凄絶なる情死と謂はねばならぬ。

明末の大患をなした流賊は、陝西地方の飢饉に乘じ叛旗を翻した。當時北邊には清兵の中原を窺ふあり、内には流賊の禍を受け、腹背敵を被り、其鎮壓に充分の兵力を用ゆることが出来なかつた。その虚に投じ、北陝の一無頼漢李自成は、破竹の勢を以て四方を剽掠し、懸軍長驅、居庸の嶮を破り、遂に彰儀門から城内に侵入した。

斯くと聞ける毅宗帝は景山に登つて御覽あれば、烽火天を焦して物凄き光景、事已に非なりとし、急ぎ宮殿に還り、太子を戚家に送り、皇后を自盡せしめ、妃嬪を殺し、帝親ら鐘を鳴して百官を召した。宗社の滅亡目睫に迫れるも、守備の兵闘志なく、心亂れ膽戦き、一人として最後の死戦に身を挺せんとする者がなかつた。帝が「朕は亡國の君に非ず、爾等は亡國の臣なり」と、百官を怨罵したのは此時のことである。帝今はこれまでと景山の壽皇亭に登り亭下の樹に縊れて果敢くなり給ふた。此時まで獨り左右に侍

りし王承恩は、健氣にも冥土の御供仕らんと續いて樹枝に縊れ節に殉じた。

斯くて成祖の永樂十九年こゝに皇居を定めてより二百二十四年の間、文恬武熙、太平の夢圓かなりし北京城は、脆くも一流賊の手に奪はれのである。「思陵在位十七載、四海分崩成瓦解、去年失楚今失秦、大梁水決武昌焚、虎豹九關誰與守、三軍倒戈百姓走、君主仗劍死煤山、母后中宮殉玉環、桐棺一寸道旁置、故老行人多掩涕、大廟應呼十四皇、兒家何罪致天亡、新鬼泣號舊鬼哭、鐘鼓慘裂燈無光、高勿哀、文勿怒、自古興衰有天數、順處得來順處去、君不見宋家遺骨瘞冬青、昌平猶鬱松柏樹」是れ尤侗が「思陵痛」、誦し罷んで當時を追想すれば、悲痛の情森々と胸を衝いて來る。

景山は正しくは「萬歲山」といつて、周圍二支里、五峰并立、高さ百餘丈、北京の主鎮である。「五岳來朝日、三山路不迷、長楊秦苑北、盧橘漢園西、珠斗凌眞近、瑤峰入望高、萬年同聖壽、何用訪丹梯」と、明の歐大任が詠せし如く、京師の最直中に兀として聳えて居る。之を我東京に求むれば愛宕山と髣髴たるものである。愛宕山は寶祚と無窮であるが、景山は常に亡朝の哀史を留め、坐に行客の涙を揮はしめて居る。



山上に亭あり五、燦爛たる黄瓦、參差萬翠の裡に輝く。山の周圍は短垣を環らし、後に小門二つあり、東を山左裏門、西を山右裏門といふ。左右裏門の中に壽皇殿ありて廣さ九間、康熙帝の神位を安んじ、乾隆御製の碑文がある。殿の東北に興慶閣あり。殿の東を永思門と呼び、内に永思、觀徳の二殿あり、明の舊制に仍れるものといふ。景山の正門北上门は南の方神武門と相對して居る。關帝立馬の像にて名高き護國忠義廟は、觀徳殿の東に在る。此邊一帶、樹木深密、毅宗帝の雉經された一株の常磐樹は、鐵鎖にて圍まれ憑弔攬古の紀念として遺つて居る。

此山は一名「煤山」といひ、不虞に備ふるため石炭が埋めてあるとの説〔野獲編〕もある。併し其眞偽は固より保せられぬが、李自成が北京を攻めた時、西山の煤道を絶つは城を抜くの第一策であると建議した者があるといふ、之に徴しても強ち虚構の俗説でも無いやうである。中華門前の碁盤街（今は建物なし）も、其地底に多量の木炭を埋藏してあるといふので、景山の「煤山」に對して其處を「炭海」と名くる。

斯くの如く、景山は、其蒼翠滴らんとする明媚なる山態、城内何處よりも景仰する

ことを得べく、景致の妙、北京に於ける唯一の色彩であり、史上に於てもいと哀むべき明の末路を語る遺跡であるが、今は一般の登攀を許さぬ。

予は幸に此禁の布かれる以前に屢ば登臨することを得、山上より幽燕の形勢と、禁關の壯麗とを類瞰し、感慨轉た禁することが能はなかつた。噫。昭王の覇圖は恨として已ぬる矣。忽必烈の雄畧は誰か其後勁たる。若夫れ明清の興亡は、其事の既に眼前に在る、其跡の之を今日に徴すべき、身を天風に側て、殆んど西臺の慟哭に擬せんとするものがある。一部洛陽名園記は實に先賢の閑文字に非ず、萬井の鶯花都て幾多の浩劫を開す。以下歴叙する所、三たび意を此に致すのである。先づ眼に入る蜿蜒たる長壁上より筆を抹する。

〔附記〕（一）毅宗帝（思宗、崇禎帝、莊烈帝）の縊死せる時、衣襟に書せる遺詔に曰く「朕涼德義躬、上千夫咎、致逆賊直逼京師、皆諸臣誤朕、朕死無面目見祖宗、自去冠冕以髮覆面、任賊分裂、無傷百姓一人」堂々たる王者の言、悲痛の辭、一讀暗涙に咽はしむ（二）庚子役（明治三十三年亂匪事件）に日本兵此山を占領せる時に兵士の間に俗語流行す「景山は昔しや天子の物見台、今ちや日本の涼臺」（三）民國六年復辟戰の時張勳は此山上に砲陣を布き城外の段軍に應じた。



## 一 數字の城壁

遼、金、元、明、清を経て現在の民國に至るまで、城壁に當つて碎けた歴史の潮流を汲み取れば、この馬鹿げたる建築は實に支那歴史の生きた證據である。城壁の雄大は、舌の能く盡す所でなく、是非とも數字の解剖に俟たなければならぬ。

北京市即ち現在の北京城は、内城(都城)外城(羅城)の二城に分れて居る。先づ内城よりすれば、周圍四十支里、南面が二千二百九十五丈九尺三寸、北面が二千二百三十二丈四尺五寸、東面が一千七百八十六丈九尺三寸、西面が一千五百六十四丈五尺二寸ある。城壁は石を以て基礎とし、甃を甃して之を築き、中に泥土を充て、その高さは下石上甃共に三丈五尺五寸ありて、堞即ち城頂の兩側に對立するひめがき(女牆)の高さが五尺八寸、址厚即ち基底の厚さが六丈二尺、城頂の廣さが五丈ある。これに九つの門を設け、南の正面を正陽(前門)門、南の東を崇文(哈達)門、南の西を宣武(順治)門、と稱し、東の南を朝陽(齊化)門、東の北を東直門、と呼び、西の南を阜城(平則)門、西の北を西直門、と云ひ、北の東を安定門、北の西を德勝門、と名づくる。

城壁の角に角樓が三つある(以前は四つであつたが、西北角樓が取毀されて今は無い)それから城堞即ちあづち(射塚)が百七十二、雉堞が一萬千三十八、礮窓即ち砲を撃つ穴が二千百八個ある。昔は正陽門の東西、崇文門の東、宣武門の西、朝陽門の南、東直門の南、德勝門の西に各々水關を設け、鐵柵を以て護つて居たが、今は正陽門と崇文門との間に便門を設けて、公使館區域より停車場に行く便を開き、又民國四年に正陽門の左右にも洞門を開いて交通の便を圖つて居る。此洞門を開くが爲に、正陽門外の甃城(一名月城)を取拂つた、今門外に一大樓の孤立して居るのは取遺された甃城の一部で之を箭樓と名くる。城壁の外側に沿ふて正陽門より西直門側まで環城鐵路(京綏鐵道支線)が敷設されて居る。それが爲に東南角樓下に一孔を穿ち、朝陽東直、安定、德勝の四門は、正陽門と同様に甃城が取壞され何れも箭樓だけ遺つて居る。外城は原と内城の四面を圍繞し、七十餘里の大城とすべき規制であつたが、工費の都合でたゞ南面を包み、轉じて東西の角樓を抱いたのみで中止された。周圍二十八支里、南面は二千四百五十四丈四尺七寸、東面が一千八十五丈一尺、西面が一千九十三



丈二尺ある。下石より上輒まで高さ二丈、堞高四尺、址厚二丈、城頂の廣さが一丈四尺ある。七門を設け、南を永定門、左安(將才)門、右安(南西)門、東を廣渠(沙鍋)門、東便門、西を廣寧(彰儀)門、西便門と呼んで居る。角樓六つ、城堞が六十三、堆撥房が四十三、雉堞が九千四百八十七、砲窓が八十七ある。

東便門の東、西便門の東に各々水關が設けられ、内城と同様鐵柵を以て防備してある。それから東便門の南に一孔を開いて京奉鐵道に、西便門の南に一孔を穿つて京漢鐵道の通路として提供して居る。數字の城壁はざつとこんなものであるが、内外城其城門の上には各々城樓(譙樓)が設けられ(中には破壊して取拂はれて居るものもある)高く天空に聳へ、無言の内に幾世變遷の跡を物語つて居る。

〔附記〕 順序として此次に(一)北京の變遷(二)現在の北京(三)各門の歴史(四)城壁環り(五)北京と交通等を述ぶるつもりであつたが、紙面の都合で(一)及(二)は「北京沿革史」として一冊に纏め、其他は第二卷に掲ぐることにした。

### 三 丁鈴、丁當

日本から始めて北京に来た人が、劈頭に度膽を抜かれるのは城壁で、その次に驚されるのが「駱駝」だそうだ。それも其筈、上野の動物園か淺草の花屋敷でなくつては見られぬ異形の怪物が、ノソリノソリと面も眞晝間に市中を練り歩くのだから、目馴れぬ人が面喰ふのも無理でない。朝早く場末の胡同を通ると、客棧近くの道傍に、此怪物五六頭、太平樂に寝轉んで居るなどは支那でなくつては見られぬ圖である。

駱駝といふ字は多く禽獸草木の名を識るといふ詩經にもなく、十二支の中にも入つてない。此獸が支那本部に其姿を現したのは、確か漢の時代で、武帝の時張騫といふ探検家が、黄河の源流探検を企て、その時伴つて歸つたのが抑々の濫觴。此男黄河の源は、牽牛織女の兩星に發し、織女星が機を織る臺石まで見届げたと途方もない法螺を吹いて世人を馬鹿にして居るが、駱駝を支那本部に移殖させ、歐亞交通の便を圖つたのは感心である。玄奘三藏も此獸の脊に運ばれ、天山北路、回鶻、カシミールを通つて印度に入つて居る。それから成吉思汗が東羅馬に遠征したのも、佛教も、回教も



人も、物資も、皆これがお蔭である。

其性温順にして歩調の鈍きこと牛歩に彷彿として更に遅々たるものがある。力量の強いので石炭の如き固形重體の運搬に便利で、一頭四百斤を負ふて一日一百支里を行くといふ。脊に貯水袋があるので水なき遠路の旅には至極重寶がられ、糧秣は比較的低廉だか多量に要するので一頭で一ヶ月十二三元を下らぬさうである。普通一人の駱駝夫で七頭を牽き、一日の賃金一組で五元内外とけ餘り安いともいへない。文明の今日でも、尙天山を越へて土耳其斯坦より波斯に入り、眞西に向へば歐州、南して亞刺比亞に通ふ唯一の交通機關「沙漠の舟」として無くつてならぬものとなつて居る。

吾等は此駱駝が、頸に懸けた鈴を「丁々當々」と振り鳴して北京城内を練り行くを見る時に、北京が原始化せられるやうな感を催すのである。序に言つて置くが、宮殿や墓道のほごりに飾り物として、赤銅や大理石で作つたものが遺つて居る、これは漢代に駱駝が珍重せられた時代の遺制で、人間の像を「翁仲」といふが如く、赤銅にて作つたものを「銅駝」と支那人は呼んで居る。

#### 四 文天祥祠

「是氣所磅礴、凜烈萬古存、當其貫日月、生死安足論、天柱由以立、地維由以尊」とは宋末の忠臣文天祥が絶叫した「正氣之歌」の一節である。何ぞ其辭の壯嚴なる。宗社の危急に際し、孤兵を提げ國難に當りしも、刀挫け、矢折れ、擒られて獄に投せられた。後、元人其の忠節を重じ、誘ふに丞相の官を以てしたが従はず、遂に一死を以て君國に殉じた。其の文天祥授命の遺蹟が北京にある、今は此處に祠を設け、文山の靈を祀つて居る。

内城安定門大街の東に「育賢坊」と題した牌樓がある、そこが即ち府學胡同で其路北に順天府學の跡がある、文天祥の祠は實に其中に在る。胡同の東口路北に「忠烈祠」といふ匾額が掲げられ朱門が閉してある。其鄰の木柵を以て圍まれた門が前清時代の府學で、次の門は陸軍部衛隊歩兵第四連の兵營となつて、出入を禁じて居る。門の突當りに、衣冠せる二つの繪像を書いた木板などが見えるから、大概の者け、其處を文天祥祠と取り違へるのであるが、それは全くの見當違ひで、それよりも尙ほ東の方に



「文丞相祠」の匾額ある小門を過ぎ、其次に京師公立十八國民學校といふがある、其門から入らねば、眞實の祠には參詣が出来ぬ。校門の受付に案内を乞ふと、先づ洋式應接間に請じ、備付の參觀名簿に記名させる、許可を得ると初めて品の好い支那人が出て来て、丁寧にあつて説明の勞を執つてくれる。

校舎の中を縫ふて奥に進めば古木修然たる内に、小さな祠がある、それが即ち文丞相祠で、此處が有名なる元朝の刑場「柴市口」の跡である。今の祠は明の永樂六年北平按察司副使太常博士劉崧（履節）が勅命を奉じて建立したものである。其後度々重修されたと見え、明大學士楊士奇の「重修文丞相祠記」等が遺つて居る。祠の入口には康熙年中順天府尹錢晉錫の書いた「萬古綱常」の匾額と、其左右に「敵國仰威名一片丹忱昭史冊、法天留策對千秋正氣壯山河」といふ同治年間致譯敬が撰書せる堂聯とが懸けられてゐる。

正面の神座には、前に「宋丞相信國公文公之神位」といふ古色蒼然たる位牌ありて其後方に丞相の衣冠せる塑像が安置されて居る。像は初め儒者の衣巾を纏うて居たが

明の景泰年間、天祥に諡を「忠烈」と賜ふた時（附記二）改作したもので、風姿清秀、堂々として長者の風がある。公の遺像に接し、その英風を欽すれば、日月を貫く忠肝義膽、凜として堂に滿ち、思はず襟を正うする。

神座の左右に「正氣常存俎豆至今尊帝里、孤忠立極神靈宜近接靈宮」その後方に「南宋狀元宰相、兩江孝子忠臣」と、黑板に金字せる楹聯がある、前者は十八世孫柱薫沐謹書とあり、後者は十八世孫工部主事柱敬書、劉金門小宰句と書いてある。また堂を入つた左右に前清同治六年に文輅といふ人が書いた「正氣貫人震河岳日星垂萬世、明禋崇廟貌丹心碧血照千秋」の對聯がある。祠の東西兩壁にも聯が掲げてある。聯の右に五個の題壁石刻があつて、何人にも自由に石摺を許す、圓形の二個は唐の李邕の書いた「雲、慶、將、軍、李、秀、の、斷、碑」である、文字磨滅して明でないが今は國寶となつて居る。康熙三十一年八月順天府々丞右門吳承の書いた「雲、慶、將、軍、斷、碑、記」と、光緒十八年順天府々尹濟寧孫揖書の「雲、慶、斷、碑、題、後」も至極の出來榮えである。

清の嘉靖年間南京戸部主事嵩山李世徳の「過文先生祠」と題した「十年燕市過公祠



瓦閣松陰去馬遲、九死欲回唐宇宙、一生輕繫漢威儀、雲飛斜照歸人晚、霜重無枝棲鳥疑、千古中原今故在、忠臣遺恨可曾知」といふ石刻は楷書の大字で之を石摺して行く者が多いとのことである。祠中には又歴代順天府々尹の書い「古誼忠肝」「天地正氣」有宋存焉「仁至義盡」等の匾額が處挾きまでに掲げてある。神座の前の「遺像碑」は幅三尺高さ四尺「宋丞相信國文公像」と書き丞相の衣冠を帯びたる像を刻し、その上に文公衣帶の銘が刻してある、曰く「孔曰成仁、孟曰取義、惟其義盡、所以仁至、讚聖賢書、所學何事、而今而後、庶幾無愧」これも石摺が出来る。

茲に面白いのは、正氣の歌の愛誦者として知られた赤穂義士の領袖大石氏を祭つた高輪泉岳寺の參詣者は、一日平均五百人、三月のお祭時には一日三千人を數へ、一年間の線香料が三千餘圓にも上るといふから豪氣なものである。而して正氣の歌の本家本元たる北京の文天祥祠に、お詣りする人は毎年二十人に足らぬ、それも文文山の生地江西から出て來た教育家が多いといふ。北京に在住する日本人の多くは其所在さへも知らぬ、従つて來遊者の此處を訪ふのは稀である。番人の談に據ると、團匪事件當

時は日本人の參詣者が相當にあつたが、近來は頓んどなく、茲五六年間で五六名位に過ぎぬといふことである。

祠中（門を入つた直ぐ左方の「廊」）に文山愛賞と稱する「丞相楡」が現存し、定軍山下に在る武侯祠前の森々たる古松と共に不凋の大節を相競ふて居る。詩聖杜甫は武侯祠に「出師未捷身先死、長使英雄淚滿襟」と題したが、此文山祠に謝翱の「西臺慟哭記」を刻したら雙壁であらう。

〔附記〕（一）祠の西に在つたといふ「懷忠會館」は何れであるか今は判然とせぬ。（二）文天祥と謝枋得に誼を請ふた明の韓雍の疏は「春明夢餘錄」の二十二卷に載つて居る。（三）文天祥が獄中で正氣の歌を作つたのは元至元十八年日本の弘安四年で恰度元寇が來襲した時である。（四）其翌十九年節に死す年四十七。（五）明章懋謁文丞相祠詩「元宋興亡迹已陳、忠臣祠宇尙如新、夕陽古樹烟猶暝、夜雨荒塔草自春、慷慨六歌空酒淚、間關百戰竟捐身、穆陵地下應含笑、不負臚傳第一人」（六）明顧清謁文山祠詩「碧殿長松鎖十尋、晚雲將雪助悲吟、貂蟬不改匡山制、金石疑聞孔壁音、南去星潮嗟往事、北來祠宇豈公心、春風一掬唐衢淚、幾爲先生濕短襟」



五 謝疊山祠

宋末の忠臣といふよりも寧ろ「文章軌範」の著者として名高い謝枋得（疊山）の祠も北京にある。宣武門を出でて、大街を南に突當り、珠市口を西に折れて行くこと數町西磚胡同を南に入り、醋章胡同を右折し、更に爛湧胡同を南に曲つた、法源寺後街第二號に在り、恰度法源寺の裏門通りの北に當る。「江右卿祠」と「文昌閣」と並び「謝文節公祠」と書いた門額はあるが、極めて粗末な家で、餘程氣を附けて探さねば目に着かぬ。法源寺に行くには必らず此祠の前を通らねばならぬが、面に當つて錯過する人が多い。祠の一部は「外右四區警察署第一半日學校」と變つて居る、表には學校と「外右四區貧民借本處」の看板が不風流に懸けられて居る。

門を入ると直ぐ、「謝文節公祠記」と「謝文節公祠碑銘」の題壁石刻がある。小門を潜つて進めば南面した小さな祀堂がある、此處で疊山は憤死したのだ。明の景泰中、韓雍の上疏により、文天祥と同時（前回文天祥祠参照）に諡を「文節」と賜ふた際に建てられたといふが、恰度文天祥の祠を其授命の處に設けたと同様である。

祠の入口には「薇馨堂」と題した匾額が懸つて居る、何人の書かは知らぬが筆力雄渾此祠にふさわしい。薇馨堂とは、謝公の死が恰も彼の伯夷叔齊が薇を首陽山に採り、周の粟を食はずして命を終へたのと相似て居るから、其馨香は千載の下に聞ゆとの意を踏んだものであらう。「蕭寺愴忠魂回首故郷何處是、橋亭留片石傷心祖硯幾時還」といふ咸豐二年眞州裔孫增黃沐書の堂聯がある。

正面には「朱江東提刑江西招諭使知信州謚文節疊山謝公之位」の神位を前に塑像が安置してある、像の大きさは三尺に足らざるが、眼光射るが如く長髯の老爺が衣冠せる態、當時の義節を髣髴たらしむる。神座の上には姚文田書の「首陽高節」と陳廷恩書の「朱鳥來食」の匾額がある、甚だ薇馨堂と鈞合ふ。

謝枋得字は君直、宋末信州弋陽（江西上饒縣文天祥は江西廬陵縣）の人、生れて聰明、書籍を讀むに五行一度に下り一たび讀めば終身忘れぬといふ學者であつた。而も忠義の志極めて厚く、徳祐の初、元兵江東に寇せる時、奮戦して敗れ、變名して山中に隠れた。宋亡びて元の世となり、皇帝忽必烈人才を求むるに當り、禮を卑して召さ



れたれども應せず、固く忠臣二君に仕へざるの操を守つた。至元二十五年、福建行省參政魏天祐の爲めに強て伴はれて燕京に来るや、謝太后の攢所、及び福國公の所在を訪ひ、再拜痛哭し、後病に罹り、幾くも無く憫忠寺に遷つた。

不平の情遣る處なく悶々として暮して居たが、偶々寺の壁間に「曹娥碑文」を掲げるを見て、泣いて曰く「小女子も義によりては猶死を潔よくす、男子の身にして、何ぞ汝に若かざらんや」と、それより寺後の小堂に閉居し、食を絶つて憤死した。今堂中に「小女子豈不若哉向蕭寺招魂新公祠宇、大丈夫當如是也與文山比節壯我江卿」(彭邦疇撰句、陳延恩書)と「行遯矢孤忠奔走荒山遺跡猶傳建陽市、捐軀明大義淒涼古寺傷心還懷孝娥碑」(姚文田書)の二對の楹聯があるが誦するに足る。

曹娥は東漢和帝の世に、上虞に住んで居た。幼にして孝女として評判高く、(附記二)其父曹肝は、當時天下無比と稱せられた舞の上手であつた。ある年の端午節に、舟を江中に浮べて痛飲した。酔ひの廻るにつれ思はず起つて舟中で舞ひ、誤つて江に落ちて溺死した。時に娥は年甫めて十四。江に沿ふて號哭すること七日七夜、遂に身を江

中に投じ、其後五日にして已も死したるまゝ父の屍を脊負ふて浮ひ出でた。里人其の建氣なる小女の志を哀みて、之を江邊に葬り、小祠を建てて其苦孝を表した。程なく其事朝廷に聞え聖旨を以て旌表せらるるに至つた。

帝は曹娥を弔ふ文を邯鄲諄に命じて作らしめた、諄は直に筆を執り一氣呵成に名文が就つた、時に年十三。謝疊山が讀んだのは即ちこの邯鄲諄が書いた碑文であつたといふ。又一説には王羲之の書であつたとも傳へられて居る。何れにしても原は石に刻したものでないらしい。此碑文に就ては有名な話がある。後に唐大儒蔡邕が其文を讀み題して「黃絹幼婦外孫壘臼」と云つた。此意味は黃絹は色ある糸即ち「絶」である。幼婦は少女即ち「妙」である、外孫は已の女が生んだの子で即ち「好」である。壘臼は辛味を受くるもの即ち「辭」である、即ち「絶妙好辭」と賞賛したのである、蔡邕ならでは出来ぬ天下一品の隱語で今尙ほ人口に膾炙する文壇の逸話である。

曹娥は身を殺して遂に父の屍を得た。謝公は國滅びて忠を盡すに君なく、節を屈せず絶食して死を求めた。忠孝の二美譚である。少女の孝を想ひ、烈士の節を慕ふ者一



度は必ず訪ふべきである。「北風塵起、征車促、南火傷心、不再嘘、三敗猶還、仲母在、兩旬忍餓、漢臣如、歸降當日、原無表、却聘留、今只有書、天使先生沈卜市、建陽橋亦首陽居」とは明の袁繼成が此祠を弔ひたる詩である。

〔附記〕(一)曹娥に關する話は演義三國志や其他の神史に載つて居る。(二)東漢和帝の時代は皇后の師範をして居た、彼の有名なる班昭が「女誡」を著した時で、孝女烈婦が多く出た(三)謝枋が絶食して死んだのは至元二十六年で年六十四。

## 六 松 筠 庵

楊繼盛(椒山)といへば誰も知る明の忠臣である。世宗の晩年に至つて嚴嵩宰相となるや、奸臣を登用し忠臣を殺戮し、内政紊亂して遂に明社の危機を醸した。時に椒山は兵部員外郎の職にあつたが、宗社の危急傍觀するに忍びず、上疏して、嵩の十大罪五奸を劾した爲め、忽ちその怒に觸れ、詔して獄に下され、後、哀れ罪なき忠臣は、菜市口(順治門外)にあり、文山授命の柴市口とは違ふ)の刑場に劊刀の鏽となつた。

順治門を出で、二番目の西に昔の炸子橋今改めて達智橋といふ胡同がある、その東

口路南に、老刹潮慶庵と相對し、「松筠庵」といふ風雅な古亭がある。門前の土壁に「楊外山先生故宅乾隆乙巳七月穀旦汾湯後學曹學閔書」の石刻あるが如く、これぞ楊忠愍先生の故宅で、一代の快男兒は此處で起臥して居たのである。義を慕ふ者の一度は行つて見べき處だが、悲しい夫、在留邦人で之を知つて居る者は殆ど無い。

門を入れば、左に石碑あり、劉石庵の書であることは確だが、今は文字磨滅して明でない。正殿の楹聯には「經云殺身以成仁、奕々丹心早擬權奸之魄、公曰浩氣還太虛、巍々廟貌常留忠烈之魂」堂聯には「燕市宅依然兩疏共傳公有膽、幹山堂在否十年不出彼何心」とある。「御製表忠論」の堂額を仰いで堂に入れば、正面に神古りたる塑像が安置されて居る、朝冠せる長髯の神像、威風儼として四邊を拂ふ。像の左右に「不與炎黃同壹輩、獨留青白永千年」と曹學閔の書いた聯がある。位牌には「朋兵部員外贈太常寺少卿諡忠愍外山楊公神位」と書かれ、神像の左右に侍童の像が二つある。堂の左右に、歴代忠臣の位牌を安置し、堂の内外には八個の題壁石刻があつて、何人にも自由石摺を許して居る。その内に、有名なる「忠愍の諫草」がある、言々肺腑を衝い



て、當年の意氣を思へば、血湧き肉躍るを覺ゆる。

堂の裏に「松筠庵條規」と「賢科道公捐松筠庵祀典記」と「重修松筠庵寫堂記」等の石刻がある。參拜人は此處から出入するやうになつて居る。後殿入口の匾額は「正氣鋤奸」と躍るが如く、殿の中央に掲げたる乾隆御裂の「旌忠祠詩」と共に、一大光彩を放つ。後殿は「代夫死之疏」で有名なる椒山の妻張氏を主として祀つたもので、椒山の像牌と並び「楊忠愍公元配張氏夫人神位」の位牌と、塑像とが安置してある。神像左右の聯は「兩疏敢彈奸侃々危言先生信是有膽、一章乞代死哀哀苦語夫人克稱其名」とあり、乾隆中胡李堂といふ人の書いたものである。殿前に老柏がある、轟々天を刺し、其老幹枯枝を、數百年の風霜雨雪に打たせつゝ、尙天地を睥睨して何言をか語つて居る。

椒山の死後、何人かが此庵に模頭(假彫刻)の神像を安置し、これを城隍神と云傳へて祭つたことはあるが、忠臣の故宅として弔ふ者もなく、世人から全く忘れられて居た。それを清の乾隆時代に、御史楊壽楠、都御史李融視の二人が、城中巡視の際、楊

忠愍の故宅なることを發見して、禮部尙書曹學閔刑部尙書阮葵生、待御鄭徵等と相諮り、忠愍の故宅として、天下に發表すると共に、「松筠庵」と名づけた。爾來士大夫遊燕の所となつたのだ。今の庵は、清の道光二十八年九月に、心泉と云ふ僧が重修したものである。寄石古木の風致に富んだ院子を圍み、廻廊に添ふた長亭がある、そこが即ち有名なる「諫草亭」で、楊椒山が諫草を書いた處である。今は荒れ果ててその一部に、僧侶や庵の守などが、暢氣な顔して住んで居る。

康有爲が、三たび徳宗帝に奉つた「萬言之書」は、此諫草亭で書いたといふから面白い。廣東の一舉人から一躍して宮中に入り、清末の注意人物とまで成り上つたのは翁同龢(徳宗の侍講)の取次も與つて力あるが、萬言書を草する處として態々楊忠愍の諫草亭を選んだなどは、あの老却々味のあることをやつた。此亭中に「鐵肩擔道義、辣手著文章」と書いた半疊大の石刻がある、それが擬ふかたなき椒山の眞筆で、實に天下一品である。從來曾つて、人の顧みる者の無かつたのは驚かざるを得ない。

一體楊椒山は其學に比し、書が拙であるとは、學者の定論であつた。彼の葉德輝す



ら斯く云つて居るが、其實大に然らず、楊州の金山寺に納まつて居る手紙を見ても、其出来榮は顔真卿に優るとも劣らぬ位である。著者によつて發見せられた亭中の石刻を見てもこれが立證される。序ながら江湖の爲めに其誤傳を正して置く。

椒山獄にあるや、嚴嵩獄卒に命じ、彼を酷打して苦しむること甚しく、肉破れ骨碎け其惨見るに堪えぬものがあつた。友人見るに忍びず、窃に「蝮蛇の膽」を送つた、蝮蛇の膽は、之を口に含めば打れて痛まず、火中に在つても苦しみを感せぬといふ靈藥と傳へらる。椒山之を退け「椒山自有膽、何用蝮蛇哉」と豪語し從容死に赴いた。その絶命の詩に曰く「浩氣還太虛、丹心點千古、生平未報恩、留作忠魂補」と、大男兒の心膽天下を呑むの概がある。「諫草留遺石、年々化碧痕、悲風吹古木、大鳥叫祠門、青史平生事、内楹故國恩、永陵北望在、流涕向黄昏」とは、清の尤侗が此祠に謁して作つた詩である、尤侗ならずとも一度此祠を訪へば低徊去るに忍びざるものがある。

〔附記〕(一)楊繼盛は明容城の人、字仲芳、椒山と號す、明嘉靖進士、嘉靖三十四年棄市、時に年四十一、穆宗の時忠愍と諡す(二)蝮蛇膽に關する戯曲あり、京都大學の鈴木豹軒博士所藏せるを見た。

七 七 間 樓

椒山の故宅を書いたから、其敵役の嚴嵩に就ても書いて見る。權威皇室を壓した當時の嚴嵩は、今の宣武門外南橫街の東、南北斜にある丞相胡同に、堂々たる邸宅を構へて居た。その南に、南半截胡同といふがある。そこが有名な「嚴嵩の七間樓」があつた處である。今は其面影もなく、普通の住家に還つて居るが、その昔は、此別墅で王公貴人も及ばぬ暮しをしたものだ。何にしる、支那上下三千年の歴史を通じ、此男位横暴で、且つ豪奢を極めた者はなく、清の和坤と共に、後世の物笑ひとなつて居る。

嚴嵩は、弘仁の進士で、世宗に重用せられ太子太師となつた。恃寵攬權、賄賂を貪り兪邪に親み、忠節の士を退けた。其子世蕃は太常寺卿となつたが、親に劣らぬ奸物であつたといふ。椒山の死後、鄒應龍が極端に嵩父子の不法を鳴らしたので、遂には帝も其奸を觀破して島流しの刑に處し、親子を京師より放逐して了つた。世蕃は途中から逃歸り、捕えられて斷頭台上の露と消え。嚴嵩は乞食となつて身を果てたといふ、



今現に京東通州の北門外に嚴嵩が橋下に座して食を乞ふたといふ橋が遺つて居る。

嚴嵩の放逐後、その邸宅は、悉く官没されて梟がついたが、金銀寶玉の贅を盡した、王者振りには、道の役人をして、嘔然たらしめたといふことである。そのなかで殊の外驚いたのは、彼の寢室の一隅に、女の絹足袋が、山をなして積まれて居たことである。これは淫奔度なき彼が、天下の美女を募つて弄び、一女を御する毎に必ず足袋を脱かしたといふことである、これを「淫籌」と言つて、明の張獻注が、纏足せる女の足首を庭中に積み、ピラミット型の頂邊に、愛妾の足までも載せて喜んだと、好一對の馬鹿話である。

嚴嵩は一風變つた性格を持つた男であつた、怪物が好きで殊に蛛を愛したといふ、現に此近くに「蛛巢街」といふ胡同が残つて居る。それかあらぬか彼の死後、此邊一帶に怪物が出るこの噂が立ち、終には宮殿にも異變度々起り、よなよな十指の怪物が現れて宮人を驚かした。李東陽をして「大學に曰く、十目の視る所、十手の指す所、其れ嚴乎とあれは不思議に非ず」と天下第一の諧謔を吐かしたのも此時である。

彼は其飛ひ放れた行動から推して、無學のやうに聞えるが、其實はそうではない。前にも述べた如く進士で、却々の學者で、詩文共に一家をなして居る、其詩文を集めたものに「鈴山堂全集」といふのがある。孔雀毒ありと雖も文章捨つべからずなどと賞賛する嚴嵩の崇拜者もある。之等嚴嵩擁護黨に言はしむれば、椒山の上疏は、虛構のことだとして放言して居る。彼が書いたもので現存して居るものは宮闕では天安門、午門、神武門、端門の額がある。正陽門外糧食店路西中和園の隣りにある北京第一の漬物屋「六必居」の看板(表のものでなく、店の中にあるもの)の如き最も優なるものである。山海關城壁上の「天下第一關」も、間違のない嚴嵩の眞筆である。

〔附記〕七間樓は其後清の聖祖が大學士王熙に賜ひ「怡園」と名づけられた。毛奇齡の怡園の詩に「山莊清沐駐驂驛、曲徑通街出巷南、繞到射堂門啓處、門紗映出一山藍」「青溪百折流低、不見挑花路已迷、欲向岩前尋舊迹、漁舟尙在洞門西」「赤闌斜度暗杉關、樹底吹笙鶴自還、行過摘星岩畔望、紅亭高出碧雲間」「小雨初過景倍清、山堂段饌午烟晴、綠腰唱罷羅彈俱歇、滿耳惟聞流水聲」「草花續樹晚猶生、石棧連雲斷復行、怪道午橋風景別、一花一石手經營」「平門近市亘修廓、西北高樓傍粉牆、桂檻下臨光德里、柳絲低拂水壘坊」とある、莊麗以て知るべしである。



## 八 墨 盒 兒

北京に遊ぶもの、先づ御土産として買ふのは、大概「翡翠」<sup>フエツイ</sup>と極まつて居る。多く  
 の人は北京が翡翠の本場位に考へて居るが、そうでない。翡翠の本場は廣東で、北京  
 は賣口が好いので、比較的優良な品が集まるといふに過ぎぬ。ところが茲に、見逃す  
 ことの出来ぬ北京名物がある。それは「墨盒兒」<sup>モクホウニ</sup>即ち墨池である。北京の墨盒兒は、江  
 西省南昌の象眼した竹細工と、湖南の刺繡と共に、支那に於ける三大名物の一つとな  
 つて居る。墨盒兒は、如何考へても不精者の考案らしくもあるが、震鈞氏の「天咫偶  
 聞」に據れば、明末の崇禎頃から流行しだして、當時硯を使用する者は殆どなくなつ  
 た位である。之れが爲め硯が壓伏されて一番好いのも十元といふ價の品がなかつた  
 といふから、推して知るべきである。これと同時に「鑿刻」<sup>ゾウコク</sup>が發達して、名人の刻つ  
 たものになると、五元位の値段で、墨池と雖も馬鹿にならなくなつた。爾來今日に至  
 るまで調法がられ北京名物の一として、市場に優勢な地位を占めて居る。琉璃廠や勸

場等に行けばこれを商ふ店が澤山ある。

材料は、白銅即ち洋銀を使ひ、多くは漢口から來て居る。一體漢口の白銅は非常に  
 品質がよく「水煙袋」の如きも漢口の銘がなければ賣れぬといふ位である。其形狀は  
 十二三前までは圓か或は四角の物ばかりであつたが、今は八角、扇形、菱形、隋圓形  
 等種々なものがあつて趣向を擬らして居る。彫刻は北京が最も好い、本人の注文通り  
 何でも刻つてくれる。「蘭亭序」<sup>ランテイシ</sup>とか「洛神賦」<sup>ラクセンヒ</sup>などを細かく彫刻したものを市場に見  
 受ける。近時藥品で腐蝕させて、斑紋を出す爲め、尠からず雅致を失なつた。普通二  
 十仙から一元五十仙位の値段で、時代物になると、骨董品として取扱はれ、従つて價  
 も高いが今は餘りに見當らぬやうである。

墨盒兒と同じく、綿と墨汁の好いのが北京に在る、墨池用の蠶絲綿を、特別に灰汁  
 を抜いて精選し、一定の長さに切り、包んで賣つて居るが、一包二錢位である、一寸  
 した墨池には十枚以上入れねばならぬ。日本では俗稱「斑枝花」<sup>ハンシヤカ</sup>原名アスクレピヤス  
 を用ゐるが、筆の穂先に細い物が附着して好くない。夏期には、腐敗を防ぐ爲めに、



樟腦を小さな袋に入れて片隅に入れて置く、粕が下に沈澱するから、綿だけ靜に取つて、時々掃除するがよい。

墨汁は、南方では見られぬ位濃厚な精品がある、極く小さいのが三十仙、普通が六十仙で買へる。墨盒兒は蓋さへして置けば、決して墨汁が外部に漏れぬから、旅行にも携帯便利であるし、墨を磨る手数を省くから、大概の人は之を使用して居る。書家の如きも扇や一寸した聯位は、墨池でお免蒙つて居る。

### 九 偽 物 屋

北京は遠に骨董國の首府だけあつて、稀には珍品がないでもないが、利に敏い内外の好奇者共が、鵜の目鷹の目で漁り歩いた揚句の果だから、そう堀出物のあるう筈がない。従つて偽物が市場に優勢を占めて、大概の者は偽物を握ませられて悦んで居る。片端から北京の偽物屋を漁るとなると、夫こそ大變だか、今茲には偽物屋の代表とも云ふべき、書畫古瓦硯等に就て述べる。

一體書畫の古物を買ふ人が、誰でも直ぐ、理屈に箝まつた物を欲しがら、即ち紙とか肉色とかを標準とするが、それが抑々の間違である。支那の偽物専門家となると、宋の紙とか、明の紙とか、或は絹とか、其時代の物を保存して居る。而して之に雙鉤填墨といふことをやつて、巧みに誤魔化して了ふから堪らぬ。

雙鉤填墨といふは、其輪廓を透寫した後で墨を塗るのだが、其手際は實に巧妙なもので、稍もすると玄人でも一杯喰はされる。彼の端方さへも元の梅道人（吳鎮）の偽畫帖を握ませられたとは有名な話である。又古い畫の「色揚げ」をやることもある、それは氣を附けて見ると、一二個所位綠青の落こぼれがあるから直ぐに曝露する。要するに、理屈に箝つたものは、總て贗物と思つて置けば間違が少ないやうだ。「乾隆御覽之寶」なごいふ隋圓形の印があるのは、殊に危険である。

硯もなかなか好い品が集まるが、其キメが皮膺と同様の物を買へば大概間違はないやうだ。それから端溪の偽物は北京が本場であるとは一寸氣附かねことだ。其偽造秘法に至つては、お釋迦様でもお存じないことだが、思切つてお傳授する。端溪の「鵝



眼」即ち班紋を出すには、鼈の小便を用ゆるといふから甚だ以て珍々妙々である。鼈の小便を出すには、その鼻の穴を、豚の毛でつくくのだが、強情な奴になると、其位では却々小便を脱れぬ、そうなるに彼の脊中を火あぶりにかけると、奴さん耐らなくなつて、やきもぎする所を急にひつくり返すと、苦し紛れにジュツとやらかす、それを暖めたる硯の上に滴すと、忽ちにして裏面までも透つて了ひ、目を經ると見事なる班紋となつて現はれる。鼈の便毒は非常に猛烈で、一疋の鼈を入れて置いた器物に、他の奴を入ると忽ちにして死んで了ふと云ふことだ。

六朝時代の古瓦を偽造する専門家も北京に居る。銅器になると到底素人には解らない、甚しいのは小便壺の中に浸して置いて、古錆を工合好く出すそうだ。張之洞が北京で買った二千兩の古鼎に金魚を入れて滅茶苦茶になつたといふ耳新しい話もある。これ等の偽屋は多く、琉璃廠や隆福寺の近傍に巢を構へ、大仕掛でやつて居るが、外部からは容易に覗ひ知ることが出来ぬ。だが石刻と書物には絶対に偽物が無い。

## 十 雍 和 宮

清朝の外藩懷柔政策の遺物として北京に「喇嘛廟」が五つある、即ち雍和宮、黃寺、黑寺、隆福寺、護國寺である。その内で最も有名にして總取締ともいふべきは「雍和宮」である。北京に遊ぶ者は必ず此廟に參詣し、今では北京名所の優なるものとなつて居る。

## (イ) 雍和宮喇嘛廟の起原

一體此「雍和宮」は康熙の頃の雍世府で、雍正帝が未だ實位に上らざりし前の府第即ち「潜邸」であつた。潜邸とは親王が其邸より出で大位に即かれた時其邸を「龍潜藩邸」と稱して空屋敷となし、餘人の居住を絶対に許さぬといふ慣例であつた。それを雍正帝登極の後、府中の大部分を章嘉呼圖克圖に賜はり喇嘛淨修の靈場とした。大概の人は「雍和宮」と「喇嘛廟」とを同一のものにして了ひ、又斯く信じて居る者が多いやうだ。普通世人の謂ふ「雍和宮」は彼の高い屏で圍まれた内の全體を指してい



つて居るが實際はそうでない、即ち以前の雍正府の「西廓」を喇嘛に喜捨し、其後佛堂や僧寮を建て加へたのが「喇嘛廟」であつて雍和宮はそれ以外にあるのだ。當時喜捨しない「東廓」は行宮として其後も時々皇帝の行幸があつた、これが即ち「雍和宮」である。

此行宮の部分は今日でも喇嘛とは全然無關係で、單に俗人の門番が置いて在る、雍和門と永祐殿との間に高い屏を以て區劃をなして居るのが即ちそれである。この部分は雍正府であつた時の佛堂と花園であつた、實に立派なものであつたらしいが、其後火災に過ひ建物の大部分は焼失して了つた、今では焼けて残つた築山や基石や古木が僅かに去ぎにし昔を偲ばせて居る。斯くの如く嚴密にいへば劃然と名稱が異つて居たのであつたが、何時の頃にか「喇嘛廟」と「雍和宮」とが混同されて、今では雍和宮になつて了つた。

(ロ) 清朝の藏蒙懐柔

清朝政府が西藏及蒙古懐柔に就て如何に力を注いだかは、歴史を播く者の誰でも知

つて居る通りである。簡畧に述べると、喇嘛教は西藏化せられた佛教の一種で、西藏人は勿論内外蒙古人は悉く喇嘛教を信する。而して喇嘛は無上又は上人といふ意味で「達賴喇嘛」即ち「法王」は、神の命であつて、神聖にして犯すべからざるものとして居る、現に西藏では此法王が、首府拉薩に於て、宗教及び政治を統べて居る位である。故に達賴さへ丸めて置けば外藩統治上に非常な便利がある。早くもそこに着眼し、自邸を喜捨し彼等の歡心を買つたのは、雍正帝の大手柄といはねばならぬ。斯くて除々と清朝の威權を外藩に伸張し、乾隆の中葉に至つて統治權を掌握して了つた。順治帝も嘗て太和殿の西に黃寺を建立して達賴、班禪を駐京せしめたこともあつた。斯くの如き意味からして、北京の喇嘛廟は歴史上の遺跡として名高きのみならず、宗教の感化が如何に威大なるかを想見する生きた證據である。

(ハ) 其道、筋、と雍和宮、碑

雍和宮は安定門の東、北京城の東北隅に在る。崇文門大街を一直線に東四牌樓を更に北に進み、北新橋を過ぎて城壁に突當らんとする路東に、黄色の瓦を以て葺かれた



る大寺院がそれである。雍和宮大街に沿ひ表に「十地圓通」裏面に「福衍金沙」を乾隆御筆を匾せる華美なる牌樓がある。それより入れば更に北方に牌樓がある、これも同じく乾隆帝の「寰海尊親」「群生仁壽」の御筆を表裏に匾して居る。それより木立を中を縫ふて北に向つて進めは「昭泰門」に達する。此路の左右扉を以て圍めるは喇嘛の僧寮である。黄衣、赤衣の僧侶の出入を見る。

昭泰門を入り、鐘樓と鼓樓とを左右に見、愈々正門の「雍和門」に達する。門の前には銅製精巧なる古銅獅二座を置き、東西に碑亭あり、(西は此碑を藏蒙兩文に譯せるもの)東には乾隆御筆の「雍和宮碑」がある其碑文に曰く

雍和宮碑文

皇考世宗憲皇帝肇封於雍邸在京師良維與太學左右相望迨紹續大統正位宸極爰命舊第曰雍和宮設官置守葺宇墾飾無增於昔示弗忘也越歲乙卯弗弔吳天龍馭上賓攀髯莫逮維時喪儀具展禮當奉移念斯地爲皇考藩潛所御攸躋攸寧幾三十年神爽憑依倘眷顧是廼即殿宇而飭新之以奉梓宮易覆黃瓦式廓門屏泊星綽楔規制畧備泊山峻禮成於此敬安神御

歲時展禮至於今十稔予小子紹庭陟降之忱朝夕圖繹深惟龍池肇迹之區既非我子孫析珪列邸者所當褻處若曠而置之日久蕭莫更不足以宏行慶澤垂壽於無疆曩我皇考孝敬昭事我皇祖凡臨御燕處之適且久者多尊爲佛地曰福佑寺則冲齡育德之所也曰恩佑寺則鼎成陟方之次也永懷成憲厥有舊章而稽之往古修真本唐高龍躍之宮慈慶乃渭水慶善之宅宋則祥符錫慶祠號景靈咸因在潛之居實曰神明之隩後先一揆今昔同符是用寫境祇林莊嚴法相香幢實綱夕唄晨鐘選高行梵僧居焉以示蠲明至潔也以昭崇奉至嚴也以介福釐至厚也我皇考向究宗垂證涅槃三昧成無上正等正覺施洽萬有澤流塵劫帝釋能仁現眞實相群生托命於是焉在豈特表範眸容爲章淨域已哉予小子瞻仰之餘間一留止緬憶過庭怵惕興慕敬勒石以紀系以頌曰於皇皇考提福無疆奕奕朱邸積慶流長乘六以御茲焉發祥時雍協和聖謨孔彰其鼎成于湖神御攸奠陟降在天聖靈式着愾乎斯聞僂乎斯見超宋景靈邁唐慶善其懿彼淨覺廣樹良因澄圓性海般若通津慧燈普照法寶常新敷華玉地轉曜金輪其矧是丹宮藩封拜賜載寢載興凝禱集瑞人世香台梵天切利擁吉祥雲開歡喜地其標新福界冥契慈緣雁堂集侶鹿苑棲禪香華送雨具葉罪烟雲車風馬歆願珠筵其仰惟聖德昊天罔極以妙



明心運大願力孰爲權應孰爲眞實無去無住歷化千億其慈雲廣蔭甘露長濡入涅槃海繫如意珠恒沙大千共味醍醐不可思議泱隨淪膚其灼灼靈儀巍巍瑞相言瞻言依徘徊側愴十地四天鴻恩融暢盡未來際永資慈睨其八

乾隆九年歲在甲子冬十月

此碑亭の東側に「寶票處」がある、そこにて觀覽料（小洋五角、童僕半價）を支拂ひ、瞻覽票（入場券）を得て初めて雍和門（天王殿）に入る、それから各殿門の入口に掲示されて居る番號の順序に參觀すれば、見落すことなく一巡することが出来る。

（三）第一處天王殿と大石碑

先づ「天王殿」（以前の雍和門を乾隆年間改む、今尙檐下に雍和門の額あり）を入ると其入口で入場券を改める。門の正面一段高き處に木製渡金の布袋尊者……西藏名、化生迦拉補。

が安置してある。佛像の上に「現妙明心」の匾額、其左右には「法鏡交光六根成慧日、牟尼眞淨十地起祥雲」の聯がある、何れも乾隆御筆である。其左右には四天王の大塑

像がある、右を

增長天王……南方護世鳩槃荼主。藏名、怕克濟布。

多聞天王……北方護世大藥叉主。藏名、伊喀霍爾蘇榮。

その左を

持國天王……東方護世乾闥婆主。藏名、那木泰司列。

廣目天王……西方護世大龍王主。藏名、占密桑。

といふ。布袋像の裏面に安置せる木胎金身の武裝せる立像は

韋馱天神……藏名、吹蘇倫。天竺名、韋馱。

といふ。雍和門を出づれば、彫刻精巧なる銅製の大爐がある、普通「銅爐」と呼び、香爐にあらずして惜字即ち文字を書せる紙片を焚く爐である。其次が有名なる乾隆御書「喇嘛説方碑」である、碑には喇嘛説が書かれ本文實に二千百五十四文字、漢字の外に蒙滿藏を加へ四種の文字が記されてある。此碑文を見ると大畧ながら元朝以來の政治と喇嘛教との關係や、喇嘛教の歴史を知る事が出来る。それより直ちに「雍和宮」



に入るのであるが、順序として東方の「温度孫殿」を參觀するが便利である。

(ホ)一切經を入れた轉輪  
 温度孫殿の軒下に金屬製の圓い筒が二個ある。これは有名なる「轉輪」蒙古語でいふ「マニニホルロ」である。南の方が周圍三尺五寸餘、縦一尺五寸餘、其上に周圍一尺二寸餘縦五寸位の小圓筒がある。北方の分は周圍四尺、縦一尺八寸位で各々屋根形の物を以て覆てある。表面には西藏文字でオムマニバトメウン(漢字で唵嘛呢叭彌吽と書き願ふ所は蓮華上の寶座といふ義)即ち南無阿彌陀佛と六字の妙語を現して居る。此筒の中には、無數のオムマニバトメウンを印した薄い絹を、幾枚となく、又幾百丈となく、固く巻いて入れてある。其中心に心棒を立てて好く廻轉する様になつて居る。之れを幾回となく廻轉すれば、數限りなく念佛すると同じやうで、其功德利益は一切經を讀誦すると同様であると云つて居る。マニニホルロの小なる物は喇嘛僧各自身邊に置き、大なるものになると周り一丈有餘高さも亦一丈餘りもある、五台山の大廟に幾つもあるといふことである。

(ハ)第二處温度孫殿

温度孫殿には、正面二階建硝子張厨子の内に金色の

天師子比丘……………藏名、些拉巴僧戔。

を安置し、其左右には接喇嘛各一佛を祀つて居る。向つて右方壇上には二階建長屋型硝子入の箱が置かれ階下を五つに區劃し其中には各一個の

歡喜佛……………一名和合佛

と稱する奇怪醜陋なる佛像と階上には九體の佛像が祀つてあるが、此説明は次の「歡喜佛」の欄にて詳記する。天師子比丘の左方には、彩色を施せる佛畫

五金剛護法畫……………藏名、多爾濟札阿。天竺名、巴司爾札嘎。

其次には、觀音の化身といふ

綠枚渡佛母……………藏名、諾若章瑪。蒙名、諾根達拉哈。

の畫像あり。其左端には常に赤布を以て覆てある

馬王佛……………藏名、達木林。天竺名、哈史黑執瓦。



の降魔の畫像がある。圖は八足六手、三面九眼の馬王佛が、長蛇を束にせるを足踏みとなし、鮮血淋漓たる無數の生首を携げ、其下方にも之に類せる鬼神が怪獸に乗れる態を描き、之に濃厚なる彩色を施し一見眉を瀕めしむる。其他無數の畫像佛器ありてそのろ陰怪な気分になつて來る。

(ト)第三處雍和宮

殿の正面一段高き壇上には五個の佛像が安置してある、中央は當來下生佛……藏名、邁達拉。天竺名、彌勒佛。

の座像で背後の調刻は精巧を極めて居る其向つて左に立てるは譯飲光……藏名、沙里布。天竺名、迦葉。

即ち天竺第一祖師で、之に相對して立てる右方の佛を

譯慶喜……藏名、蒙葛拉吉布。天竺名、阿難。

即ち天竺第二祖師である。左右の座像二體は何佛なるか不明。

佛前には、鼎、燭台、花瓶、法傘、等所謂七珍八寶が供へられ、其内で有名なのは

銅製の輪(蒙名、富爾都)と硝子張りの箱中に納めたる、壇城(蒙名曼札勒)即ち極樂世界の模型である。例により「按引群生揚三千大化、圓通自在住不二法門」と「法界示能仁福資萬有、淨因臻廣慧妙證三摩」の乾隆御筆の聯がある。殿の左右壁下には十八羅漢(日本は十六)を安置してある。其羅漢の順は、殿を入り向つて右より十八、十六、十四、十二、十、八、六、四、二。左方入口より十七、十五、十三、十一、九、七、五、三、一となつて居る。左に十八羅漢の名稱を參考の爲めに擧げて見る。

- 第一尊羅漢……藏名、閻喇克仲。天竺名、賓度羅跋羅墮闍尊者。
- 第二尊羅漢……藏名、瑪潘木巴。天竺名、迦諾迦伐嗟尊者。
- 第三尊羅漢……藏名、那克那奈。天竺名、賓頭盧頗羅墮尊者。
- 第四尊羅漢……藏名、對丹。天竺名、難提密多羅慶友尊者。
- 第五尊羅漢……藏名、多爾濟莫伊布。天竺名、拔諾迦尊者。
- 第六尊羅漢……藏名、桑布。天竺名、耽沒羅跋尊者。
- 第七尊羅漢……藏名、色爾別烏。天竺名、迦哩迦尊者。



第八尊羅漢……藏名、色布皮朝克。天竺名、伐闌那弗多尊者。  
 第九尊羅漢……藏名、巴占喇。天竺名、戒博迦尊者。  
 第十尊羅漢……藏名、喇占森。天竺名、半託迦尊者。  
 第十一尊羅漢……藏名、喇木布楞。天竺名、羅怛羅尊者。  
 第十二尊羅漢……藏名、蘇布呢雅木林。天竺名、那伽犀那尊者。  
 第十三尊羅漢……藏名、喇木丹。天竺名、因揭掩尊者。  
 第十四尊羅漢……藏名、魯伊得。天竺名、伐那都婆斯尊者。  
 第十五尊羅漢……藏名、畢勒吉特。天竺名、阿氏多尊者。  
 第十六尊羅漢……藏名、彌濟得巴。天竺名、注荼半托迦尊者。  
 第十七尊羅漢……華善尊者。藏名、化生迦拉補。  
 第十八尊羅漢……藏名、格寔達爾瑪。天竺名、達拉瑪達拉尊者。  
 羅漢後方の兩壁には刺繡せる佛畫が掲げてある。殿を出やうとする後門の左右に小型の金佛が安置されて居る。左は當來不生佛。右は

觀世音……藏名、占來斯伐。天竺名、阿那婆婁吉低輸。  
 殿を出でて右方(東)の「額木奇殿」に向ふ。  
 (チ)第四處額木奇殿  
 「額木奇殿」を入ると、中央に壇城が置かれてある。正面の後方硝子張の佛龕中に三體の佛像がある、中央を  
 黃教祖師……藏名、宋喀巴。又は羅布桑喇伐巴、又は皆林波伽。又は達伐呢。  
 といふ。黃教祖師は明の永樂十五年四月十五日青海西甯衛に生れ、同成化十四年十月廿五日示寂するまで、黃教を普及した祖師である。其右は  
 藥師佛……藏名、曼塔。蒙名、敖達齊。天竺名、鞞沙闍。  
 本殿の主佛だそうだ。左は名稱が解らぬ。前方の中央は  
 斑禪佛(藏名)……黃教祖師第二大弟子(第一大弟子は達賴)  
 其左に弓を引ける四手の佛像は空行佛母(藏名、沽魯沽哩)で、右の馬に乗れる佛像は名稱不明である、像の前に讀經台あり、殿の左右兩壁には無數の繡佛像を掲げ又小



佛像、太鼓、佛器が雜然と列べられて居る。それを見終へて又中央に歸る。

(リ)第五處、永佑殿

「永佑殿」の中央には三體の銅佛を安置し、中央正面を

無量壽佛……藏名、阿由式。天竺名、阿彌陀佛。

其向つて右を

獅吼佛……藏名、僧剛阿略。天竺名、森哈吠迭。

其向つて左を

藥師佛……藏名、敖達齊。天竺名、鞞沙闍。

殿の西北隅に小さな佛像がある、之を

千手觀音菩薩……前に説明せり

又、東北隅には觀音の化身と稱せらるる

綠救度佛母……蒙名、諾杆達拉哈。

がある。其左右東壁に二十張の繡佛がある。無量壽佛の裏面に金剛般若波羅密經の石

刻が二張吊げられて居るが、いづれのものなるや不明である。聯に曰く「般若慈源覺海原無異派水、菩提元路德山相見別峯雲」乾隆御筆である。

(又)第六處、東配殿

右方の「東配殿」が、今では雍和宮第一の名物となつて居る所謂「鬼神殿」にて先づ殿を入れ、正面の犧牲壇に五體の歡喜佛が布を以て蔽ふてある。(此説明は後段「歡喜佛」の欄(歡喜佛頁)に詳記せり)

堂扉の左右に、高さ四尺、身長二間に餘る犬の如き長大なる動物が、頭を伸べて相對して立てゐる、全體暗黒色で、肉色のドンヨリしたる眼光は一種の凄味を帯びて輝いてゐる。之は罷。(蒙名、窩托格)と稱し、乾隆帝が巡幸の時、乾隆十九年八月二十日吉林の額林嘉摩に於て帝親ら射止めたる熊二頭があつた、一つは重さ九百斤、一は重千斤といふ、其模型(南は雌北は雄)である。其下に踞つて居るのは虎。(蒙名、巴拉斯)一は豹。(蒙名、依爾伯斯)何れも乾隆捕獲の模型である。其左右に槍を持て相對して起てゐるは當時皇帝に隨行した勇敗なる四將軍の像である。



(ル)第七處法輪殿

中央の大堂を「法輪殿」といふ。此殿は廟中の喇嘛僧全部が朝夕二回此處に集つて讀經をする莊嚴なる道場で本名を「都嘎喇經道場」と稱す、此道場に就て蒙藏院は左の如く説明してゐる

都嘎喇經道場説明

都嘎喇者譯即白傘蓋之義此經爲天竺西番根本儀軌乃聖宗喀巴上師諸大弟子推行佛旨會合而成就者也經中儀節繁多若能敬謹持誦或在山林或在花園或在自己居室之中凡自心所暢適之處灑掃清淨以佛像或壇城供奉於上一切緊要供物如八吉祥供物等量力備辦供之佛前修持之人沐浴潔淨於如意座上按儀軌坐好身前几上設鈴件樂器等件虔誠誦習視自身儼如佛身以至面目手足俱不參差朋顯觀習淨除俗見自能增修智慧成就諸業於中更有無邊功德當於城鎮鄉邑人文會萃之區益爲宣傳以彰佛法俾天下一切衆生同入廣大法門安享平康之福是則成就此經與傳述此經者之初意也至若此經爲應機之妙旨爲赴道之捷徑又何疑焉今衆生困厄咸望承平建此道場惟願佛天大慈普施覆幬之恩救庇娑婆世

界祛諸災難同獲安康如是慶祝

頗る手前味噌の説明であるが、必要の人もあると思ふから掲げて置く。中央には壇を設け、臺上に純金の佛像を安置してある、これが此廟の本尊で

譯能仁寂默……藏名、沙吽迦圖巴。天竺名、釋迦牟尼佛。

である。普通の釋迦牟尼佛と面相を異にし喇嘛式であるが、此尊は乾隆十年正月二十日に特旨を奉して西藏郡王頗羅鼎が雍和宮に供進した有名なるものである。此佛像を供奉する所は法教大に興るとまで稱せられ、御製の讚に

佛身普週諸大會、充滿法界無窮盡、爲救世間而現身、究竟本無身可現、如妙蓮花出諸水、水與蓮花無二性、是則名爲轉法輪、西天東土何分別、

とある。其後方に一段高き寶座がある、正面に一軸の刺繡せる

無量壽佛……藏名、寫巴吽摩達。蒙名、阿由式。天竺名、阿彌陀佛。

が在る、精巧無比で雍和宮第一の寶物といふ。其背後に檀香木を以て造れる五百羅漢山……藏名、聶丹阿布札。



は彫刻の精巧なる點に於て名高きものである。佛胎は皆金質、其下に五個の佛龕……蒙名、博爾罕蘇爾

がある、著名なる寶物として珍重されて居る。其他東西の兩壁には

三世佛十八羅漢……藏名、蘇木桑結奈丹朱路葛。

佛母摩利支天菩薩壇場……藏名、瑪喇色哈木。天竺名、鄂色勒占瑪。

等の大繪像を掲げ、其下には喇嘛僧が毎日使用する西藏文の經典が、一包つゝにして山の如く積んである。其傍に黃布にて包まれた高台が「達賴喇嘛法座」である、達賴喇嘛が北京に參朝した時に、其上に座つて讀經した遺物である。その傍に瑛瑯の壇型がある。其後（東北隅）に日本式の本箱が積んである、これは

漢文甘珠爾經……藏名、伐珠爾。

といつて義和團事件の當時、我軍警衛門から寄贈した「大藏經」である。讀經時間以外の時に番僧に小銀貨一つを掴ませると見せてくれる。試みに其一本を開いて見ると支那撰述「大日本校訂大藏經」大日本帝國本派本願寺寄贈と書いてある、此經の此廟

に納めてあることは大概の日本人は知らぬやうで、名經が塵埃の中に埋れて觀る人もないのは頗る遺憾なことである。

時々置き場所が變るが、今は正面佛像の前方に、白米を満した器物がある、器は「木鉢」と稱し、龍面の鯉魚と人物等が彫刻してある、これは信者が供へた米であるが、讀經が終ると待拂へたる善男善女に高い料金を取つて分けて居る、其米を食へば病魔を拂ふといふ迷信が昔から傳つて居る。

殿には前面に「無量壽輪」後方に「妙盡無爲」の匾額と「鬘雲采護祥輪錦軸光明輝萬象、龍沼慶貽寶地玉毫國足聚千花」と、「是色是空蓮海慈航遊六度、不生不滅香臺慧鏡啓三明」の聯がある、何れも乾隆御筆である。

(オ)戒壇と藥師壇

法輪殿の左右に各三間の殿宇がある。西を「戒壇」といひ、一名「清高宗聽經臺」とも稱し、乾隆四十四年、熱河廣安寺戒壇の式を改めて建てたものである。壇は三層每層石欄を以て圍ひ佛像を列べてある。「律持定慧」の額と「法會啓無邊共守直如願力



律宗超最上總持寶相因縁の聯がある。

東を「藥師壇」又は「班禪樓」といふ、重樓上下各五楹、戒壇と相配して乾隆四十五年八月に建てられたといふ。中に寶座（蒙名、額爾德尼菩薩古林）がある。樓上に「能仁普度」樓下に「慈雲應念」の額と樓上に「寶地徧沾切德潤、香臺恆擁吉祥花」樓下に「廣一切善緣現莊嚴相、普如是功德發歡喜心」の聯がある。兩殿共今は門を閉して公開してないが、番僧に頼めは參觀が出来る。

(ワ)第八處照佛樓

法輪殿を出で、左方の石階を降りると「照佛樓」である。西方の入口を入つて左折すると、北端に精巧なる彫刻を施せる佛壇ありて、南面せる大佛像がある、即ち

旃檀佛……釋迦佛を旃檀木に刻せるより此稱あり、蒙名、昭伯爾罕努魯爾。

又周昭王二十四年に生れたる故に名づけて「昭佛」ともいふ。

其左右の立像佛は右を阿難、左を迦葉といふ。その前方佛龕の中に法身は玉製で、法衣は金製の小佛像がある、これも有名なる

金鑲玉無量壽佛……蒙名、阿育什。

である、乾隆帝の「御製金鑲玉無量壽佛讚」が龕に刻されてある、贊に曰く

過去燃燈、未來彌勒、現在釋迦、三身一德、是無量壽、是兩足尊、是何佛法、青蓮在盆、誰噪鳴鳴、無非讚嘆、三際豎穹、十方橫遍、不離於座、寶蓋蔭乘、祥雲甘露、稽首歸依、

其右側に乾隆欽定の

旃檀佛繪像……長一丈六尺（清初の名手乾檀寺の木像に照して繪く所）

があつたが今は無い。それより更に右の小室に入れば東壁に有名なる

六道輪廻圖……藏名、色勒得布霍爾勞。蒙名、桑斯、又は桑斯仁富廻都。

がある。三眼長爪の魔物が、輪廻圖を抱いて居る。圖は輪の如く縁を取り、縁の中には善行、惡事等現代世相圖ともいふべきものを描き、中には婦人を姦して居る光景などが露骨に現してある。縁に囲まれた中央には、人體を軸とし車輪型に所謂天道、人道、修羅、地獄、餓鬼、畜生の六道（六趣）を圖解し、因果應報（天上と人間とは善趣の輪廻、他の四つは惡趣の輪廻）の理を示して居る。



(カ) 行宮の焼跡

行宮の焼跡を訪ふには、照佛樓の北端の小門からするのも便利である。番人が居るから其承諾を求めて門を入れれば、十三間の二階建がある。これは雍正府の佛殿である殿内に小佛教が無數に安置され、其他碑亭や、所々に焼残りの殿堂があるが、見るべきものはない。中央假山の上より當時の美觀を想像して引返し、照佛樓側に歸る。

(ヨ) 第九處、萬福閣

法輪殿の後方に三層の高樓がある、「萬福閣」又は「大佛樓」といふ。其の右方の高閣を「永康閣」左を「延綏閣」と呼び、三閣併立相通して當時の結構想像するに餘りある。永康延綏は常に閉ざれて參觀を許さぬ。萬福閣には有名なる立像の「大佛」がある、高さ約六丈計り、木彫で全身黄金色に塗つてある。傳ふる所に據ると、西藏から大佛壇を取寄せて一本の木で作つたといふ、果してこれが事實であるとすれば天下無比の佛像である。たく惜しむらば其相貌に慈悲なく、稍々險惡の相があるのが謂はば玉に疵である。

殿内には乾隆及咸豐御筆の聯額が所狭きまでに懸けられ、東西兩壁には一面に繡佛が下けである。大佛の後方に廻つて見ると、木製の岩中に陶器製の觀音を安置し、其傍には小兒、閻魔王、魚類等が配合してある。「南海觀音」と稱し、兒授けの佛として子無き女の參詣が多い。

(タ) 第十處、綏成殿

南海觀音より後方に抜けると、一段低き處に「綏成殿」がある。三體の佛像を安置す、中央は三面六手の佛で之を

大白傘蓋佛母……藏名、都戔拉。即ち如來の化身で傘を以て衆生を蓋ふ。

左右には觀音の化身と稱せらるる

白救度佛母……藏名、喀拉戔拉。蒙名、察杆達拉哈。

緣救度佛母……藏名、喀拉章。蒙名、諾杆達拉哈。

を安置する。殿の東方に七間の長殿あれども中には查爾擦布達喇嘛を祀つて居るだけである。西方の殿には左の五佛を安置して居る。



天親祖師……………藏名、伊嚙呢音。

阿諦沙(天竺名)

龍樹尊者……………藏名、棍補魯如巴。天竺名、那迦曷述那。

烏着祖師……………藏名、括曳摩答。天竺名、阿僧伽。

盧本(天竺名)……………藏名、巴特瑪散巴瓦。

(レ)第十一處雅木得克樓

それより、延綏閣と大佛樓の間に引返し、西方の一廊に向ふ。其門樓上を「雅木得克樓」といふ。此樓上に狗面人體の怪佛が、首に幾多の生首を懸け數人の婦人を踏附けたる像がある。布を以て纏ひ恰も和合佛の如くに装ひ觀者を睡いて居る。好奇心に馳られ、番僧から少からぬ除布料を取られ馬鹿を見ることがある。此の樓を抜け西方に進めば休憩室がある、支那卓子に椅子とが備へてある、近處に五月蠅い喇嘛僧も居ず、お茶はないが辯當を開くには極めて調法々處である。

(ソ)第十二處武聖殿

關帝殿は西北隅にある。入口に咸豐御筆の「武聖殿」の額あり、其左右は信者より寄進せる彩色せる十數個の額が美麗に掲げられ、殿の内外も色彩を施し廟中此殿のみが手入の行届きたるは不思議である、察するに餘程御利益が有ると見える。六月二十日の關羽誕生日、五月十三日の歸天の定祭日には殊に參詣者が多いといふ。

殿の中央に黒面長髯の關帝(關羽)蒙名、格包勒。の坐像を安置せるが眼光炯々、威風堂々、實に立派な出來榮えである。著者は在支十數年到る處で關羽の像を見たが斯くの如き會心の像に接したことはない。右方の壁に懸けられたる關羽の繪像に至つては恰かも生けるやうである。北京では大概の廟は「御籤」を禁せられて居るが、此殿に限り細竹を振つて吉凶を卜ふ御籤箱があるのは一寸異様な感がある。殿前の「銅爐」は、法輪殿前のそれと共に廟中寶物の一つである。又殿前の「橋式燬籤」も珍とされて居る。

(ツ)第十三處菩薩殿

武聖殿の前に「菩薩殿」が在る。殿中に象、虎、獅子に乗れる「三大士」の像を安



置し、殿中に乾隆御筆の「香林寶月」と咸豐御筆の「妙果圓成」の匾額が在る。殿の東西兩壁に懸けられた朱摺りの羅漢像は、有名なるもので日本の某寺に在るものと同

一だといふことだ。此附近の建物は書院である。

(ネ)第十四處西配殿  
菩薩殿より、休憩室を出で、雅木得克樓の下を潜つて本境内に戻り、更に右折し、法輪殿と戒壇との中間を通り抜けると、東配殿と相對して「西配殿」がある。此殿に安置されて居る九體の立像は彫刻の巧妙なる點に於て廟中第一との稱がある。先づ殿に入り、向つて左方の立像より右に順を追ふて説明する

占巴……………天竺名、彌勒。

除蓋障……………藏名、日巴南巴拉色拉。

觀世音……………(前に説明せり)

妙吉祥……………藏名、章畢央。天竺名、文殊師利菩薩。

旃檀佛……………中央にあり、左右の小像は阿難、加葉の二佛。

大勢至……………藏名、多拉吉。

地藏王……………藏名、薩伊寧波。

虛空藏……………藏名、曩開寧波。

普賢菩薩……………藏名、根都桑布。天竺名、邨輪跋陀。

如上が九佛であるが、其他北壁に「班禪喇嘛」の畫像と、硝子箱に二體の喇嘛像がある。

(ナ)第十五處札寧阿殿

次が「札寧阿殿」である、此殿は可成りの殿堂で、喇嘛の讀經場も設けられ、殿内の裝飾も美麗である。中央に壇城(前に説明)あり、正面中央に黃教祖師を硝子張りの箱中に納め、其左を札拉薩巴(藏名)右を海魯巴(藏名)といふ。先づ向つて左方より説明する。上段に黒塗の硝子張り小箱が在る、之は

時輪王佛……………藏名、定括呼。

と呼び、本殿の主佛である。和合佛の一種だが、佛體を黒布で蔽ふて居る。其左に三個の箱中に納めたる三佛がある、これは



曇僧根補（藏名）……即ち觀音、文殊、金剛の三菩薩である。

其右北に面せる硝子箱入の佛像があるが、何佛なるか不明である。黄教祖神の右方上段に時輪王佛と同様に黒布を以て蔽ひたるを

沙拉布根布（藏名）

といふ。其右に三箇の破子張中に安置せるは

三壽佛（藏名）即ち壽佛、白救度佛母、尊勝佛母。

其右に南面せるは文殊菩薩である。四壁には和合佛の畫像が一面に懸けられて居る。

（ラ）第十六處參呢特殿

次が最後の「參呢特殿」である。其軒下にマ、ニ、ホル、ロ、が一個あるが餘程古びて居る。殿中の佛像を向つて右より順に説明する。北隅赤色の箱入りが、

白救度佛母……蒙名、察杆達拉哈。藏名、昌漢達拉哈。

其次の硝子箱入の獸面の怪佛は

熊面佛母

獅面佛母……藏名、僧洞騰。

虎面佛母

の三體で其次が大白傘蓋佛母で、中央が本殿の本尊黄教祖師である。其次が

綠救度佛母……蒙名、諾杆達拉哈。藏名、撓旺達拉哈。

次の黒色硝子入小箱も同佛、其次の稍大箱が、文殊菩薩と白救度佛母である。

これで順序よく全部を參觀し終つた譯である。參呢特殿より第一處の雍和門を抜けて前庭に出づる。廟の繪葉書や寫眞を求めたい人は、其入口で購求するがよい、此處では定價が一定して居るから値切つても駄目である。

（ム）大金佛と僧寮

斯くて昭泰門を出て歸途に就くのであるが、茲に歸途見逃がしてならぬものは、最初の牌樓を入つた突當りの牌樓（表に慈隆寶榮、裏に四衢淨關の乾龍御題あり）の傍即ち東南隅に石製の高い塔がある。其の上に鎮座せる鑛金の釋迦像は前記大藏經と同時に、北清事變戰没者供養の爲めに日本の軍警衙門から寄進したものである。其像は



京都に於て鑄造したといふから、支那に於て日本より佛像の渡來したのは恐らくこれ以外には無いと思ふ。

それから牌樓の西に大門があるのは、最近まで敖漢貝子爺が住んで居た家である。此家は元來が駐京佛爺の宿舍で、今でも喇嘛僧の上役が住んで居る、此廣庭の左右が「僧寮」である。澤山の喇嘛僧が、並び建つて居る僧寮に蠢々して居る。酒氣を帯びて居る者や、虱を取つて居る者や、亂雑見るに堪えぬものがある。この喇嘛僧共は照泰門脇の鼓樓で毎日讀經の初まる前に太鼓を打つと、ゾロ／＼と出て來る。廟内に住する喇嘛僧三百有餘、蒙古や西藏の僧侶にして、前清時代給料は皇室から出て居たが民國となつてから所謂國費多端で、蒙藏院（喇嘛廟は總て蒙藏院の管轄に屬す）からほんの食費に足らぬ額を支給さるるに過ぎない、それも時々不渡りなので、喇嘛の代表が蒙藏院に押かけ給料要求の交渉をするなどは珍らしくない。

要するに雍和宮は劈頭に述べたやうに、清朝の外藩懷柔の遺物として歴史上の紀念遺跡たると共に、西藏及蒙古式の佛像、佛畫、佛殿を研究する美術的、宗教的の參考

ともなり、殿閣の壯大は親王府第の結構を見る便ともなる。

〔附記〕（一）廟の大成は乾隆帝に待ち、佛壇、香爐、額聯等殆んど乾隆なるはそれが爲めである。

（二）佛像の名稱は蒙藏院に於て著者が親しく調査したるもので正確なるものである、上段の名稱は總て漢名である（三）佛像の手にかけて居る布は之を「哈達」と稱し、蒙古では之を非常に珍重して活佛の手にかけた哈達は牛一頭に替へらるるといふ。（四）喇嘛の儀式に關することは後に發行する「支那の年中行事」に掲載する（五）大街を挟んで廟の東方に達賴喇嘛の銅像がある、民國六年北京外館安（定門外黃寺の側にあり）の孟銅氏の建立したものである。

## 十一 歡喜佛

雍和宮に於ける「歡喜佛」は生殖的靈能の神秘を崇拜する原始的蠻人の、宗教思想を露骨に象徴化した稀世の珍物である。若しも露骨な統計が執れたらば、雍和宮に參詣する過半数は、歴史的遺物を見るときか、燕京唯一の名刹に詣るときかといふやうな、意義ある殊勝な考ではなく、ただ此珍物を拜み度い助平心否好奇心に驅られて足を運ぶ人であらうと思ふ。所が此珍物に關する記事は少ない、それは微細に涉れば皆惡とな



り、筆が滑れば風俗壞亂の懼があるからであると思ふ。著者は、雍和宮が公開して一般の參觀を許して居る範圍に於て見た其儘を、極めて慎重な態度を以て學究的に記述する。順序とすれば劈頭に目に觸れる「溫度孫殿」の歡喜佛（和合佛、天地佛、陰陽佛ともいふ）より説明するのであるが、歡喜佛は、殆んど同型で廟内で一番大きいのは「東配殿」のものであるから、此殿より筆を執る。

此殿には惡鬼羅刹を祭れるより一名「鬼神殿」（とも呼ぶ）。觀音開きの扉を排して入れば一段高き處に五個の魔像がある、皆絹布を以て蔽ふてあるが、朝夕二回の讀經以外の時であれば、番僧に小銀貨の一個も擲すれば見せてくれる。しかし足下を見透される（と一弗位も出さねば容易に見せてくれぬ）。先づ殿の正面中央に立つた魔佛は

威德金剛……藏名、吉吠給達。天竺名、雅勝達吠。

と稱し、歡喜佛の本尊である。此佛像に對し喇嘛教では「太極生兩儀、一理化爲二、眞陰抱眞陽、萬法何此始、圓滿自歸元、非二亦非一、大乘妙現示、豈論何形迹」と説いて居る。身の丈け三尺位、狗面人體にして數個の角ある奇妙な怪佛である。この怪

佛が花も羞るう菩薩の如き小さな美しき女神と相抱合して交接し、極端な處まで露骨に現して居る。この兩像の肩から腰にかけては珠子の如く串通された男女の生首が掛けてある。そして惡鬼の手足は左右各十二あつて、手に手に凶器を閃かし、その足下には男女の裸體像を踏みつけ、踏みつけられた男女は手を合して拜んで居る。兎に角猥褻極る行爲をしてゐる像であるから、普通であつたら淫情を唆る筈であるが反つて憎惡の氣に打たれる。其向つて左の怪佛は

永保護法……藏名、棍補。

といふが、これは殊に記することはないが、其次即ち左端に安置せる像は  
吉祥天母……藏名、拉哈穆。

と稱し、奔馬の上に腰掛けたる三眼の怪佛が目を見張り、左手に圓形白色の食物を掲げて愉快な面相をして食つて居る。馬の背には、婦人の身體を恰も魚か小鳥を料理して剥製にしたるが如く、胸の上より下腹に折開きたるものを、恰も馬被の如くに打掛けて、皮に附着せる生首を馬の左腹に倒さまに垂れさせ、黒髪は長く地上に引き、青



い頬には縷のやうな血潮が幾條となく傳はつて居る。而して左手と右手は胸脛の如く馬の平頸のあたりに結び着け、右手と右足とは鞞の如く尾根の下にて結んで居る。全身鮮血淋漓として腥氣を覺ゆる。其他周圍到る所に無數の生首を下げ、慘悽の状見るに堪えぬものがある。中央威徳金剛の右側が

地獄主……藏名、卻拉甲拉。天竺名、雅瑪然薩。

で、なかなか振つて居る。仰向とされる裸體の美女を、鱈魚の如き長形の頭を持てる怪獸が、鼻をうごめかし、齒をむきだし、尻尾を垂れ、異様の態をして犯して居る。その上には、獐猛なる獸面の怪佛が屹立して、手には長矛を提げ、生首を聯ねたる珠數をば腰一面に纏ひ、片手は猛獸の皮を掛けたる裸體の女を抱擁して居る。女は怪佛の巨腕に抱かれながら、碗に盛れる食物を怪佛に献上して居る。怪佛は一種非肉な笑を浮べて何んだか嘲けつて居るやうな、如何にも痛快な氣持好きそうな誇り顔をして居る、之が怪佛の所謂歡喜に満ちた面相であるかも知れぬ。其右側は

財寶天王……藏名、那嚩斯果。

で、醜體は演じてないが他の怪佛に類似して居る。佛體は何れも金泥に丹青を施したもので多分鑄造物であらう、此五體の像は必ず其前方に模型の小像が置かれて在る。東配殿は此位にして次に移る。

「溫度孫殿」の歡喜佛は、前に述べた如く、正面天獅子比丘の右方（向つて）の硝子箱の中に入れられ、都合五體何れも固く鍵をされ、白布の幕を張つて見へぬやうになつて居るが、之れも東配殿と同様、袖の下次第で參觀隨意である。先づ向つて左端より順に見る、第一番が

不動金剛秘密佛……蒙名、多拉金強。

此佛は「即二臂桑對護法首領」だそうで、獸面六手、生首珠數を腰に巻き、花も羞う裸體婦人の上に乗つて踏みつけて居る。第二番目は

金剛勇識仁樂王佛……蒙名、定嘛卻吠。

此佛は、三頭十二手の狗面人體で、黒髮房々と垂れたる婦人を屹立したる儘に抱擁して交接して居る、露骨に陰部を現はし、其周圍には赤黒の生首が數個ぶらさげてある



之は東配殿正面の威徳金剛佛と同型であるが、名稱が異つて居る。第三番目は護法佛……

と稱し、三面六手の獸面佛が、同じく三面六手の女を抱き、座つた儘で交接して居る。第四番目は

文殊化身……

といつて居るが、威徳金剛である。しかし東配殿のは一面だか、此處の像は五面三十四手で、無数の角を有し、右方の十六小手に兇器を持ち、左方の十六小手に血の滴るが如き人間の生首を携げ、赤髪の女を抱いて交接して居る。赤き舌を出し宛然犬の息がうが如き格構をして居る態は觀るものをして嘔吐を催さしむる。第五番目は地獄主……

で、前に述べた東配殿のそれと同じく、裸體の婦人が鰐魚様の動物と交接し、其上に裸體の魔佛が屹立して婦人を抱擁して居る。

「滿清秘史」の下の卷に

北京雍和宮、以雍正帝歸依喇嘛教賜名、奉有歡喜佛、或婦人裸體、與鰐魚交媾、或作惡鬼狀、裸體屹立、擁抱美婦人、或形似牛、其上有露出陽根之菩薩騎之、或婦人裸體、自背割開、注以馬尾、如是之佛像七八體、又鬼神殿中、奉有惡魔、長丈三尺餘、人身狗面、有角、與美貌女作淫狀、又有惡鬼、手持兇器、閃閃有光、足下踏有裸體男女、是等不可思議之佛像、屬喇嘛教。

とあり、巧みに歡喜佛を描寫してある。

喇嘛教の歡喜佛は、日本でいふ「聖天様」即ち「歡喜天」と異形同性の佛である。此歡喜天は印度の神様にて、最初は婆羅門教の大魔神で、十萬七千の眷族を有し、佛敎に對し猛烈なる障礙をした、後十一面觀世音菩薩の化身によりて、佛敎に歸依し、金剛曼荼羅中、金剛部の主尊となつた、梵語にて「毘那夜迦」と呼ぶ。其頭は象にして體は人間、夫婦二身、相向ひ之を抱かして立ち、左手に大根を取り、右手に歡喜團を持つ（使咒經）ので、一名を「象鼻天」と云ひ、「象頭權現」のことである。「覺禪鈔」に曰く魔羅、醜羅列王あり、



天野信景翁註して曰く「冤羅即ち梵語なり、譯して大惡冤と云ふ、彼後世戀愛の神となる、國語マラ  
その始は僧侶間の隱語なり。

章安疏に云ふ「冤羅、秦語也、譯語、能奪命、或云惡者、又云多愛欲、」  
陽物に此號を取りしも、一切の障害是より起る故か（鹽尻卷之七一）

彼専ら牛肉と大根を食ふ、國中牛少し、民、死人の肉を以て供す、死人少し、人の  
肉を用ゆ、此時國中大臣人民四兵を發して、其王を害せんとす、時に王、大鬼毘那  
夜迦となり、諸毘那夜迦を以て眷屬となし、空に飛むて去る。其後彼國中疾病行は  
る。此時大臣人民、十一面觀音を念す、爾の時、觀自在菩薩、大悲心に薰じて慈善  
根力を以て、化して毘那夜迦婦女身と爲り、彼の歡喜王の所に往く。彼王、婦女を  
見て、慾心熾盛、彼の毘那夜迦女に觸れんと欲し、其身を抱く、時に障女形、之を  
受くるを肯せず、彼王即ち覺て敬を作す、是に於て、彼女曰く、我障女に似たりと  
雖も、昔より以來、能く佛教を受け、袈裟を得、汝若しまこと我が身に觸れんと欲  
せば我教に隨ふべし、即ち我の如く、盡未來世に至つて、能く護法を爲すや否や、  
又我に従つて、諸行人を護りて、障礙をなすこと莫きや否や、又我に依りて、已後

毒心を作すこと莫きや否や、汝是の如くに教を受けば、親友と爲らん。時に、毘那  
夜迦の言く、我縁に依て、今汝等に値ふ、今より已後、汝等の語るに隨ひて、佛法  
を守護せん。乃ち毘那夜迦女、笑を含むで、相抱く、時に、王歡喜を作す。  
とある、これを讀んで雍和宮の歡喜佛に接すれば、獸面人體の魔佛に花の如き菩薩が  
笑つて犯されて居る一端が解る。

歡喜佛は前述の如く醜惡極る佛像であるが、喇嘛僧が朝夕二回の禮拜は勿論のこと  
參拜者頗る多くして佛前に焼香の絶へたることがない。そして此正視を憚るが如き醜  
像に對し、公然と婦人が參詣して、佛前に額突いて念佛を唱へて居る有様は實に珍で  
ある。何の利益があるが知らぬが、一説には石婦の禮拜する生子の佛ともいふて居る  
それが事實とするに迷信深い女の參詣するに別段不思議もないが、前述の如く好奇心  
と人間の有する或弱點に煽られてお詣りするとすれば憐むべしである。

往昔は歐洲の社會も餘り屑々として形式に拘泥しなかつたと見え、今現に奇抜なる  
紀念が處々に遺つて考古學乃至人類學上の參考として珍重されてゐる。日本でこそ風



俗壞亂の何んのと騒ぎ廻るが、西洋では此種の淫猥な物を平氣で一般公衆の參觀を許してゐる。其例を左に擧げる。

(一)白耳義のプリニクセル大街に在る「マ。ヌ。ケ。ン。ビ。ー。ス」の噴水の如きはその一つである、無心な小供が珍寶庫を捻くり旋す其の尖から噴水が飛出す装置となつて居るナポレオン一世の軍が此下を通行した時、恰も盛夏の時であつたから、士卒が之を掬みて渴を醫したことがある。後に大帝はマヌケンの功偉なりとして銅像に勳章を授けて去つたと傳へられ居る。

(二)佛國に於ける偉人國士の旌表所、即ち同國唯一の國葬院とも稱す可き巴里の「ハ。ン。テ。オ。ン」の屋瓦の中に、其檐端から雨水を樋に移す所の瓦にも、長大なる東西の形を具へる物がある、巴里に遊ぶ者これを仰き見て一驚せざる者なしといふ。

(三)巴里ルーブル博物館の一部に、世界創世以後に於けるあらゆる蠻族が、各種の物體に男女の生殖器を彫刻して、これを愛玩尊崇したものがあつた。

(四)伊太判の南端、ネーブル市に於ける、王立博物館の一隅に、秘密室と名けて一般

公衆の參觀を許さない部屋がある。之を參觀した滿鐵の上田恭輔氏は左の如く語つて居る、此處の陳列品の大部は、發掘せられたる、ポンペー市中に於て發見せられたる、主として風紀に關係ある、繪畫彫刻の物件を蒐集集せしものにして、中には純然たる宗教の色彩を帯びたる、崇拜の目的たりし各種各様の生殖器が澤山に排列せられてあつた。これに依て、古代羅馬史上を飾る神話的男女の神神が、悉く假面を脱ぎ、それが原形のまゝに於て露れ、彼ルードヴェニヒ、ホープの徒が、頗る遠まはし的に紹介したる古代希臘及羅馬人の渴仰せし、醫神の本體が最も無邪氣に且つ最も露骨に現出せられてゐるのを見るのである。

(五)巴里の國立圖書館の地下室にも、秘密室なるものがあつて、醫師と法律家と社會學の研究者だけが入場を許可せらるる一種の陳列室がある、内容の重なるものはナポレオン一世自らが蒐集せしものなりと俗稱せられつゝある。

(六)印度のベナネス(昔の鹿野園のある所)に、ネポール人の建築したモンキーテンテンプル(猿寺)の欄間には、佛像の下方に、俗身で交接して居る男女の粗末なる



彫刻物が澤山ある、其寫眞を見るに男女の交接して居る側で、侍僕が水を與へ、又は團扇で扇いて居るのを見る。

(七)孟買のエレファント、ケープ、即ち象洞の中に殿堂がある。其中にリング(梵語にしてその原意は表章の義なれども、主として男根の意味に用ゆ)の如きは、高さ二間餘もあるといふ。此リングは多くヨニー(女陰)と呼ぶ婦人の陰部を形取りたる圓形の臺石の上に、圓柱形の石片を置きたるものである。これはエレファント、ケープのみでなく、印度各地方の一寒村と雖も、禮拜堂の中には勿論、各家庭にも祭らざるもの皆無といつてもよいといふ。モニヤ、ウキリヤムの説によれば、太古の印度には、全國に亘つて十二箇所の主腦的大自在天宮が存在して居つて、その寺院内には雲を突かん程の巨大なる大理石の陽根が祀られてあつたことである。而して就中、拔群の巨物は、グジャラトに於ける蘇摩那陀と、ウジャイニの摩訶伽羅と、ベナレスの毘首吠須婆羅の三尊であつたといはれてぬる。彼の玄奘三藏も、入竺當時、陽物崇拜の盛況に驚歎して「婆羅尼斯國、天祠百餘、外道萬餘、多事大

自在天根也。大城中、天祠二十所、天根高百餘尺」といつてゐる。陽根の崇拜は古代希臘、羅馬に於てバツカス神の祭日に、新酒に酔ふた半狂亂の男女の群集が、裸體のまゝでフアリコスと稱する巨大なる男子の陽根を擔いで市中をあばれ廻つたこと等は有名な話である、それ以來生殖器崇拜を英語では Phallic Worship ファリックウォーシップ といふやうになつた。

(八)其他奇抜なものとしては、少々意味は違ふが序だから書いて置くが、巴里オリニ博物館のサスチュール、ド、シヤステ(鐵陰錠)である。これは十字軍の頃好色の一王があつた。遠征するに及んで其不在中、愛妾の不義を氣遣つて、一貝の所謂鐵陰錠を製して妾の細腰に纏はせた。其形は一種の虎圈に類し、中央に口があつて、鐵の齒を備へて居る却々妙巧な器械である。若し物あつて觸るれば齒で以て噛むやうになつて居る。全體總べて鐵を以て製つて、精巧な象眼で製飾を施してある腰に巻くやうになつて、其端に鎖鑰があるからこれを著けさせられたが最後、鍵が無ければ脱することが出来ぬ。王は其鍵を懷にして安心して征途に就いたものと見



える、天地を窮めて盡きざるものは持つて生れた助兵衛心と見える。

其他にも生殖器崇拜の實例は澤山ある。日本に於ても、歡喜天、聖天様、金精明神、塞の神、幸の神、鹽釜明神、舟玉様等の如き、歡喜佛に類せるものがある。明治五年三月の太政官布令で禁止されざる以前は、遊女屋にても之等の神を公然と祀つて居た今は公然とは祀らぬが、尙ほ内密には行はれて居る。愛知縣春日井郡味岡村大學大久保一道では「男根祭」が現に行はれて居る。之等は一々列擧することを畧して、喇嘛僧が何故にこの天地佛を崇拜するかといふことに就て簡畧に述べて見たい。

元來西藏は極めて暗昧の國であつたが、唐代佛教が印度から傳はつて來て茲に初めて文明に接觸することを得た。當時の印度佛教は瑜迦論の浸染を受けて「シバ神」といふ三眼六臂を有する破壊の神の交接を拜するといふ一種の奇怪猥褻の分子を含んで居た。だから此時に印度から西藏に傳來した佛教は、印度の「シバ密教」及び「幻術」と、それに西藏在來の「神話」及び鬼神崇拜の「ボン教」とが混合して、之に大乘佛教の或部分を加味したる一種の畸形をなして居た。喇嘛教は茲に源を發して居るから

此教徒が守護神として狗面人體の鬼神羅刹、或は異性の相擁する秘密佛を奉するは何も不思議はない、謂ば傳來の當時からの習慣を踏襲して居るに過ぎぬのである。

喇嘛教は斯く如くにして西藏に於て發芽し、其後元代に傳播した。元の忽必烈が宗教の勢力を利用し、其尨大なる版圖の統一を計らんが爲めに、朝廷に喇嘛教中のサスキヤ派の大喇嘛を始めとし、當時羅馬法王から支那に派遣せられて、布教のことに從事して居た耶蘇教使及び有力なる宗教家を召見して討議せしめた結果、喇嘛教の最も普通にして勢力あることを知つて、時の大喇嘛に西藏の政權を委ね「金帝」とか「國師」とか「法王」とかの尊號を與へて崇拜した。其後歴代の天子が、蒙古や北京に堂宇伽藍を建立するに至つて、該教は愈々熾になつて來たのである。斯くの如く朝廷に於て重用せる結果は、彼等の増長となり、僧侶にあるまじき残忍の行爲を敢てなし横暴を極めた。淫殺の二字は、元季の喇嘛僧を説明し盡して居る。元史の記す所に因ると、順帝の時に揚運真といふ喇嘛は、宋歴代の帝陵を發掘して、珍寶珠玉を取り去つたことがある。特に高宗皇帝の髑髏を切り去つたといふ一事などは、喇嘛が如何に残忍な



りしかを想像するに足る。支那の歴史家が、元は喇嘛に因て亡びたりと記して居るのは、當を得た説と想はれる。

明に至つては朝廷が、西番壞柔の策として頻に喇嘛を尊重したので、更に西陲の變を見ず、「西天佛子」とか「大寶法王」とかいふ尊稱は、能く凶悍なる喇嘛信徒を壞柔し得た。次で清朝の喇嘛壞柔策は雍和宮に於て述べた如くであるが、彼等の淫殺なることは依然として變ることがなかつた。乾隆帝が、天山北路を平定せられ時に「平定準部碑」を勒せられたが、其碑文を摩するに「其口には佛を奉ずるも、其心は乃ち夜叉羅刹の人を食ふか如く、その奉ずる所の喇嘛も、亦淫殺を以て佛事となす云々」とある。斯くの如く喇嘛教は淫殺で、「雍和宮」に於ける佛像の淫と殺と酷きことが證明せらるるのである。

兎に角この歴史的遺物を大膽に公開する所に面白味がある。神代の紀念である「塞の神」きへ煙滅しやうとする日本の官吏に見せたらこれを何と謂ふであらう。大國民は曲々たらず、萬古の聖人孔子は「郷愿は徳の賊なり」と言つて居る。

〔附記〕(一)日本の往古は家々辻々には必ず陽物を奉祀せし祠があつた(二)三國識略に滿洲遼陽城中亦有古刹、贍禮者祇于門外焚禱、不得闖入、有范生者、設法入之、見内塑巨人二長各數丈、一男子向北立、一女南面其頸、赤體交接、備極淫蕩、土人呼爲公佛母佛、崇奉其謹」とある(三)鄭所南心史に曰く「元人、千幽州、建佛母殿、鑄佛裸形、與妖女合歡狀種種、纖毫畢具、即此可證、其穢跡至明嘉靖時而滅」留青日札載に「嘉靖十五年、大善殿有鑄像、極其淫穢鉅細、不下千百、夏文愍公言、建論焚之、以請焚宮、盡付諸火、其像號歡喜佛、乃元文遺製」とある(四)印度の生殖器崇拜教徒は「陰陽兩性の交合を以て理智妙合の奧儀となし、涅槃の理想境」となし默的な秘密的儀式が行はれ、これを以て最も神聖にして毫も悖徳の行爲にあらずとの固き信仰を有して居る。(五)生殖器の崇拜に關しては上田恭輔氏著「生殖崇拜教の話」に詳記してある、本篇は少からず、該書を参考引用して居ることを断つて置く(六)蒙古西藏には現今活佛に對し女が好んで「肉身供布施」をやる之を「降福傳道」といふ(七)印度の三神とはシバ(破壊の神)ビシメ(保護の神)プラマ(創造の神)をいふ。



## 十二 喇嘛の奇薬

淫怪なる魔神を崇拜する喇嘛僧が、色慾を増進し、精力を振興する奇薬を持つて居るとの風説は昔から傳はつて居る。此興奮劑を得んが爲めに喇嘛僧に接近する者が多いとの噂もある。其眞偽は知らぬが、碑史小説などを繕けば、よく其記事が載せられ清帝の疾ある時には此奇薬を以て治療したと見えて居る。此奇薬が西藏から初めて支那本土に傳來したのは、清の世祖の時であつた、左に雜書を漁つて書いて見る。

清朝に興國の淫婦と亡國の妖婦ありて、清は淫に興り淫に終つたといつてもよい。亡國の妖婦は彼の西太后で、興國の淫婦とは、太宗の後、順治帝の母、博爾濟氏即ち孝莊皇后である。后は天成の妖艶に加へ巧笑柔媚以て鬼神を魅すに足り、肌膚玉の如く宮中にては「玉妃」の稱があつた。明の洪承疇（明朝の北部總司令で、崇徳二年盛京松山の戦ひに敗れて俘虜となり、獄中に於て絶食して不屈の決心を示して居た）を閨中に説いて清に降らしめ、愛親覺羅氏の爲めに三百年の運命を開拓したスタートと

なつたことは清朝興亡史を繕く者の誰も知つて居ることである。傳ふる所によれば玉妃には「蠱術」といふ術があつて、毎夜能く十男を御せられたといふ。太宗が兵を外に用ゐて不在勝なるを幸ひ、玉妃は布圍ひの車に美少年を載せて宮中に入れたといふ、晋の賈后、日本の吉田御殿とを合せた三幅對の珍々妙々談が遺つて居る。

當時太宗の母弟に睿親王多爾袞といふ人があつた、排行九番目に當るを以て九王とも稱して居た。太宗の突如たる崩御と共に皇位繼承問題が起つた時、九王は第一候補者であつたが、孝莊皇后の色仕掛に遇ひ、閨帳裏の夢の間に當年六歳の福臨王（順治帝）が皇位を嗣いだ。九王は其後攝政となりて益々醜聞あり、終には「皇太後の降嫁」の詔勅が發せらるるに至つた。太后といへば天子の母である、天子の母が人臣に下嫁せられたいふことは、支那史上に於ける古今未曾有の破例で、奇怪千萬なことといはねばならぬ。此詔書は明の降臣で詩人錢謙益の筆になり、實に典麗莊重を極めたものである、其畧に曰く

朕天下を以て養ふと雖も、而かも太后春秋鼎盛なり、予焉として偶なくんば、春花



秋月悄然として怡ばざらむ、今以ふに、皇叔攝政王は、周室の懿親、元勳の貴胄なり、克く徽音に配せば、永く休美を承けむ」云々

眞偽は兎に角、斯くの如くに傳へられて居る。それから九王は「皇父」と尊稱せられた。王妃詔勅により天下晴れて、下嫁し九王寵せらるるに及び、一人を以て獨り其衝に當り、尙ほ餘勇あり、其精力を竭くして王妃に媚び、その上に復た私かに宮女を漁つたといふ。荒淫度なかりし爲め彼は三十六七になつてから力を支ゆること出来ず人參、鹿茸、朮、臙、臙、臙等の強壯劑を普く天下に求めて用ゐたが大した効果もなく、日に衰弱して行くばかりであつた。此時に當つて九王に策を献した好奇者があつた、曰く「喇嘛西蕃に在り、向きに興奮藥を以て其術を神にす、今聞く其囊中に奇藥多し」とかなんとかお託宣をならべて、之を索めて用ふれば効驗があると薦めた。九王は直ちに使を派し喇嘛僧に向つて此旨を述ぶると、喇嘛は先づ皇父が喇嘛教に歸依し親しく之を祭るにあらざれば、此藥は到底求むることが出来ぬと、巧みに持掛けたので、九王は直ちに宮中に壇を設けて淫殺の神を祭るやうになつた。

此奇藥を得るまでが却々手数を要する、先づ壇を設けて、性牢、樽俎、金臺、銀蓋備さに豐典を極め、終日鐘、太鼓其他の樂を奏して囃し立てる、夜に入ると神燈を星の如くに輝かし、參列する喇嘛百八人、これが等しく經を誦して壇を繞る、その間は唱經の聲と樂の音とが混和して屋根裏も抜けんばかりである。斯くの如くにする三日三夜、漸く壇の中央に淨瓶一を置く。大さ牛膽の如く、膠皮紙を以て其口を封固し、紙上に符籙狀を載せて置く、斯の如くにして喇嘛は經を誦しなから壇を回ること良久しくして、柱錫を持つて身構えをなし「イヤツ」と大喝一聲氣合をかけると、色赤くして丹砂に似たる小粒が二つ現はるるそうである。それが喇嘛の奇藥で名けて「子母丸」又は「阿肌藏丸」ともいふ、昔し達賴第一世祖の坐牀の時、此丸を以て金瓶の中に置いて二世祖に傳へ、其後世々傳はつて居る天下の珍藥である。

喇嘛はこの藥を九王に示して云ふには「此藥は自から生息して永久不滅である、大功德の佛縁ある者が經壇を設けて誦咒すること三日、斯くて淨瓶の中に此丸を納め、復た謹んで祝すること七日、更に淨室の中に移置すること三七日、斯くして始めて其



封を啓くと薬が必ず中に満ちて居る、此丸靈驗異常、量を計つて用ゆると如何なる難症も立處に全癒する、到底人力の配製すべき所でない」と、九王唯々として其言の如くにした。而して淨室の内外は日夜嚴重に待臣をして守護させ、喇嘛は勿論のこと、斷して人の出入を禁じた。斯くて期到るとアナ不思議や丸藥瓶に満ち々々て其數約百粒に増して居たことである。試みに九王が之を用ゆると神采煥發精力大に振つたので悦ぶこと甚しく、半歳ならずして悉く飲み盡して了つた。それより後一月を経ると忽ちにしし委頓したので喇嘛を呼んで更にこれを求めんとしたが、今度は喇嘛は斷乎として拒絶した。

其の斷つた理由といふのは、此靈藥は「子母」と名づく、母があつてこそ始めて子を得ることが出来る、母までも飲み盡して了へば如何に壇を設け法を作すと雖も効なし、其の母藥は今一個達賴法王の庫中に在るのみだ、西藏までの往復は一年を要するから倒底間に合ぬといつた。九王は強いて喇嘛を出發させたが、其歸らざる内に身體頓に衰弱して終に馬より墜ちて死んで了つた。色を好む者は必ず癡を以て死すとは、

古人の言良とに誣ひない。九王と奇藥とはこれで鼻が着いたが、此事あつて以來非常な評判となり、宮室は勿論、民間でも此奇藥を無類の珍寶として尊重し、喇嘛に接近する者が多くなつたといふ。歡喜佛の崇拜と、此奇藥を思ひ合はして考ふると讀者は何物かを得るであらう。數町を離れた文天祥の祠を訪ふ者は少なくとも、雍和宮には參拜者絶間なきを見ても首肯する點が多い。今現に彼等の間には奇怪極まることが行はれて居るが、何れ「支那の宗教」を刊行する時に譲ることにする。

### 十三 北京の佛像店

現今支那に於ける佛像は殆んど北京で製造される。或地方でも製作されるが、一應は必ず北京に運んで来て、北京製と銘打つて始めて四方に賣出される、だから北京の繪梵佛像店は却々馬鹿にならぬ。北京には今佛像店が七軒ある。

永豐號……… 經理人、劉晉卿……… 北城雍和宮大街に在り  
聚興厚……… 經理人、謝鳳卿……… 全



廣聚成……… 經理人、王靄雲……… 全  
 義和永……… 經理人、劉德永……… 全  
 義合齋……… 經理人、戴笏臣……… 全  
 恒豐號……… 經理人、宗德泉……… 全  
 春興號……… 經理人、李泰春……… 全

其中最も古いのは永豐號である。此店は明の末葉清の開基に開設して、今日迄約三百餘年を経て居る、最初は張或は范姓の者が經營して居たが、後劉姓となり今の晉卿は四代目に當り、直隸省房山縣の人で繪佛像家として現代支那の第一位である。此店には畫師約三四十人居る。其他の店も大店になると同様三四十人も居るが、大概の家は十人或は二十人、下つて八九人乃至五六人等もあつて一樣でない。之等畫師の工賃は毎月六元乃至十八元である。

元來佛像は元明時代に西藏より喇嘛教と共に傳來せるものにて、其源は經卷中より出でて居る。永豐號に家寶として秘藏されて居る一經典には細かに圖案を載せ佛具は

勿論、佛畫は其形像、首數、眼數、顔色、衣の色合、又は手に持てる器物、人頭數珠を佩帶するものと、觸體骨の有無とを區別し細に入り微を穿を天下の珍品である、喇嘛僧や喇嘛研究者は特に此店に請ふて此書を借覽し範とするそうである。一體佛像（佛像とは蒙藏の繪梵佛像を指す）は其種類が澤山あるが、大畧これを「顯宗」「秘宗」「源流」の三種に分けてある。「顯宗」とは之を外に掛けて誰でも觀覽することが出来るが「秘宗」に至つては畫師一人を除いては知らず、極めて秘蜜の裡に製作せられ俗衆の見ることを許さぬ。「源流」は即ち歴代の歴史で、外に六十四家有る故實儀、注及び壇城として佛住の宮室の事を司つてゐる、此外に泥金徒靈即ち上金開光の事も有る。梵佛の名稱は約五萬餘尊もあるが其中に西藏名、蒙古名、漢名加愛（西藏と印度の間を加愛爾と名づく）天竺名（印度）等にて名づけられたるものがある（雅和宮）茲に「惡像の梵佛名」を擧げて見ると

牙門大曼。鵝哈曼拉。却力甲拉。一喀騰個力。意大馬慈森他古。賀固克力巴。森勳馬。張善布拉。甲木次朗。卡個多火力沁。店門却個。桑對。多羅已森巴。元主馬。



多羅金捻。大木林普拉卜。塔明。姜母次倫。缺甲。才保。惡囉瑪尼。白供布。白才。白可。綠可。奧德士。接連斯格。降母養。丹母經。托巴。丹母經多尼。借朗。五斯里哈。班達次。

の三十四種である。此像を描くには、先づ圖案を看て寸尺を計畫し、然る後に稿を起し、其他は紙を以てせず、前に粗布を用ひ、後洋布を用ゆるやうである。繪畫の顔料は支那の藤黄、石綠、鉛粉、赭石、黃丹、銀硃、大赤金、脂肪、廣膠其他西藏から來る藏青と獨逸品の大綠等である、之等は皆紛末であるから、夫れに水と膠とを交せて用ゆる、近來藏青の少なくなつた上に歐州戰爭以來獨逸品の大綠が缺乏して戰前に比して八倍位の高値を示して居る。

佛像は大小、長短、善相、惡相或は單尊、數尊の別あり、従つて値も同一でない。今試みに、一尺、二寸高の單尊佛像を以て論ずるに、これを三別することが出来る。惡相の最優等が十二元、優等が八元五角、中等五元、善相の最優等が八元五角、優等が五元五角、中等が三元位の相場である。其他寫眞は一枚三角位で繪葉書となれば尙ほ

廉い。又雍和宮の中で賣つて居る三四寸の小畫片は、每尊五六角から一元八角位まで有る、蒙古人は常は之を懐にし御守として居る。之等の佛像は前記の畫工が毎日描いて居て而も一枚も賣れ残りが無い、春に晝いたものは秋には賣れ夏に晝いたものは冬には捌けて了ふ。ごういふ方面に賣れるかといふに其主なるは、東三省内外蒙古、青海、西藏及北京等であるが、英、米、獨、法、伊、日、露、印度等にも輸出する。雍和宮の參拜者が參觀紀念や、御土産として買つて行くのもかなり多い。

近來古佛畫は高價で容易に手に入らぬので、寧ろ新畫を求むる傾向がある、外國人は奇形怪狀のものを好むやうである。歡喜佛などは天下の珍として一葉の畫片に數十金を投じて惜まぬといふことである。蒙古や西藏人は多く釋迦牟尼佛及び麥得立佛、哈由士佛を購ふそうである殊に哈由士佛は日本で謂ふ長壽佛で蒙古人の生辰喜慶には必ず用ゆるので其賣上が多い。京師市政公所の調査に據る佛像の賣上高は、前記七軒の梵佛店で毎年合計一萬二三元位で、之を内譯すると永豐號が約三四千元上下、聚興厚が約二千元上下、廣聚成が約一千五六百元、義和永が約一千二三百元、義合齋が



約一千三百元上下、恒豐號が約一千四百餘元、泰興號が約二千元上下である。畫工は佛像を畫く外に蒙古人の肖像揮毫を引受けて内職として居る。又之等の梵佛店は古佛の代售も營む、古佛の多くは西藏から喇嘛が携來せるもので泥製の塑像及布畫である。現在北京に在る有名なるものは、永豐號に藏せる數十年を経たる大十佛一尊。義和齊の百年前の西藏佛、二百年前の班禪佛一尊、百年前の戰不那佛一尊、同じく百年前の達那可佛一尊、數十年前の西祥天母一尊等で佛像の高は約三四寸位である、其他聚興厚に高約二尺の缺甲佛一尊を藏して居る。斯界の専門家は各店に就て親しく觀るべきである。

北京繁昌記 (第一卷終)

(附錄)

旅行者のため

日本國際觀光局編

北京を起點として居る支那内地各主要驛行汽車賃は左の通りである。又日本並に鮮滿各地行連絡汽車賃は、其月の銀相場によつて定まるので一定しておらぬから、右は茲には畧す。

▽京奉線

北京—天津 (三時間)	一等	五、二〇
	二等	三、七五
	三等	一、七五
北京—山海關 (九時間)	一等	一五、八〇
	二等	九、八五
	三等	五、二五



▽ 津 浦 線

北京—北戴河 (九時間)	北京—奉天 (廿二時間)	北京—營口	北京—濟南 (十二時間)	北京—泰安 (十四時間)	北京—曲阜 (十五時間)	北京—南京 (廿九時間)
三二一 等等等	三二一 等等等	三二一 等等等	三二一 等等等	三二一 等等等	三二一 等等等	三二一 等等等
一五九、五〇五、五五五	一三〇、九一〇、四六五	一七八、九七五	一八六、六一八、一九三〇五	一七四、七一四、二〇〇五	一五三、八〇七、九〇五	一四八、四八四、四〇〇五
			往復	往復		
			三二一 等等等	三二一 等等等		
			二一〇、九〇五	二一〇、九〇五		

▽ 山 東 鐵 道

北京—上海 (卅六時間)	北京—杭州
三二一 等等等	三二一 等等等
一三五、六三二、七二四〇〇	一三五、八六七、四一三五〇
	往復
	三二一 等等等
	四七八、九六〇

▽ 京 漢 線

北京—青島 (二十時間)	北京—石家莊 (七時間)	北京—太原府 (十五時間)	北京—鄭州 (十八時間)
三二一 等等等	三二一 等等等	三二一 等等等	三二一 等等等
一一三、〇九二、一一六〇五	三六〇、三七〇、五〇五	一三七、二一五、五〇六	一二五、八六五、三七〇五



▽京綏線

北京—漢口(大智門)(卅五時間)	北京—沙河(二時間)	北京—南口(二時間半)	北京—青龍橋(三時間半)	北京—張家口(六時間)	北京—大同府(十一時間)	北京—綏遠城(廿六時間)
三等 二等 一等	三等 二等 一等	三等 二等 一等	三等 二等 一等	三等 二等 一等	三等 二等 一等	三等 二等 一等
一四三 四九三 五〇五 〇〇〇	〇一 〇一 四一六 〇〇五	〇一 〇一 六二八 〇〇〇	一三 〇一 〇一五 〇〇五	二五 八七 七五 〇〇五	一六 五 四一六 〇〇五	一八 八 四八二 〇〇〇
往復	往復	往復	往復	往復	往復	往復
三等 二等 一等	三等 二等 一等	三等 二等 一等	三等 二等 一等	三等 二等 一等	三等 二等 一等	三等 二等 一等
一一 二八 〇〇	二 三 二四 二五〇	二 四 七〇 〇五	一 八 五八 五五	一 六 四 二 三 〇〇		

▽北支那間汽船一覽表

△大連經由海路日本行汽船便

大連汽船會社

天津—大連 (廿五時間)

特等 二等 一等 二等 一等

二五  
八五  
〇〇

大坂商船會社每週二回大連發日本行

大連—門司 (第三日)

特等 二等 一等 二等 一等

四七  
三六  
一五  
五〇  
〇〇

大連—大坂 (第四日)

特等 二等 一等 二等 一等

五〇  
四九  
三〇  
〇〇

日本郵船會社每十日一回大連發日本行

大連—長崎 (第三日)

大連—門司 (第四日)

大連—神戶 (第五日)



大連—横濱 (第八日)

△天津發日本直航汽船便

日本郵船會社每月五回(冬期ハ停航スル場合アリ)

天津—長崎 (第四日) 一等 四八、〇〇 二等 三二、〇〇

天津—門司 (第五日) 一等 六〇、〇〇 二等 三二、〇〇

天津—神戸 (第六日) 一等 六六、〇〇 二等 五六、〇〇

大坂商船會社一週一回

天津—門司 (第五日) 特等 四四、〇〇 並等 一九、〇〇

天津—大坂 (第六日) 特等 四九、〇〇 並等 二二、〇〇

△青島經由日本行鐵道汽船便

天津—濟南 (九時間) 汽船 一等 一八、三五 二等 一、九五

△長江汽船每週六回上海行

日清汽船會社

漢口—上海 (第三日) 一等 三五〇、〇〇 二等 一三〇、〇〇 官給 二〇〇、〇〇

備考 上海漢口間ノ溯江モ亦每週六回以上ノ便船アリ

△大連 青島 上海線

大連汽船會社 一ヶ月七回



北 京 繁 昌 記

青島—上海	大連—上海	大連—青島	西京丸	神丸
三等	二等	一等	二八五〇噸	三四〇〇噸
〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇

大正十一年八月三日印刷  
大正十一年八月五日發行

北 京 繁 昌 記  
不 許 複 製  
定 價 支 日 本 銀 壹 元 壹 圓

著 者 中 野 吉 三 郎  
發 行 者 支 那 北 京 崇 文 門 內 蘇 州 胡 同 支 那 風 物 研 究 會  
印 刷 者 支 那 北 京 崇 文 門 內 船 板 胡 同 牧 野 源 一  
印 刷 所 支 那 北 京 崇 文 門 內 船 板 胡 同 華 北 正 報 社 印 刷 部

發 兌 支 那 北 京 崇 文 門 內 蘇 州 胡 同 支 那 風 物 研 究 會

賣 捌 北 京 東 亞 公 司 北 京 扶 桑 館

電 話 東 局 一 八 八 一 號



北京西總布胡同



三井物産株式会社  
駐華特派員  
北京出張所

電話東局一三九五八六



三井物産株式会社  
北京駐在員

東單牌樓大街路西  
電話東局二四二〇號  
東局二九三〇號



北京米市大街椿樹胡同

南滿鐵道株式會社  
北京公所

電話東局一六八〇號

企業、投資、土木、建築

會社名  
大倉組北京出張所

北京 北池子大街  
電話東局七八四號



內外科 小兒科 外科 皮膚科  
 產婦人科 眼科 耳鼻咽喉科  
 泌尿科 X光線科 耳鼻喉科  
 紫外光線科 齒科 科  
 科 (各科主任診療)

# 北京華同仁醫院

院長 醫學博士 加茂 貫一郎

東單牌樓 三條胡同  
 電話東局(五四五號、九二〇號)

資本金 壹億萬圓

(全額拂込濟)

積立金 六千一百萬圓

本店 橫濱

支店

日本 東京、神戶、大阪、名古屋、下關、長崎  
 滿洲方面 牛莊、大連、奉天、開原、長春、哈爾濱、瀋陽、浦蘆斯德  
 支那 上海、漢口、青島、濟南、天津、北京  
 歐米 倫敦、里昂、漢堡、紐育、桑港、羅府、シアトル、布哇、アエノスアイレス、  
 リオデ、ジャ、ネイロ  
 印度 香港、西貢、新嘉坡  
 南洋方面 馬尼拉、蘭貢、カルカッタ、孟買、シドニー、スウラバヤ、パタピヤ

## 橫濱正金銀行北京支店

營業室 東局 二八〇 全  
 帳房 全 三二二九 重役室 全 東局 四六二 帳房 東局 二八一  
 重役住宅 全 三二〇 支配人住宅 全 二五四 副支配人住宅 全 九二〇



資本金五百萬圓

株式會社 天津銀行

本店 天津日本租界旭街

支店

電話 營業部 二九三  
同辦 三九五  
買辦 二〇四五  
北京崇文門大街  
電話(東局一、〇三〇)

資本金 壹千萬圓

內外為替 荷為替 當座預金  
定期預金 抵當貸付 割引手形

其他一般銀行業務精々御便宜御扱可申候

為替取組先

國內(上海、天津、漢口、九江、福州、廈門、汕頭、廣州、香港、長春、奉天、大連、濟南、青島)  
國外(東京、橫濱、大阪、神戶、門司、長崎、京城、京都、名古屋、小樽、函館、下關、台北、  
倫敦、紐約、新嘉坡、孟買)

北京東交民巷西口戶部街

中華匯業銀行

總理 陸宗輿 專務理事 柿內常次郎 支配人 李光啓

總管理處 東局四九九 專務室 東局二九六 計算課 東局二九六七  
支配人室 全 二二七八 出納科 全 二五七四 號房 全 二二七四



- ▲壹口銀五元
- ▲八月三十一日抽籤
- ▲割増金壹萬元

北京中央公園にて  
抽籤公開即時支拂



プレミアム附儲蓄券賣出し

北京打磨廠

大東銀行儲蓄部

賣大 ▲壹等 參千元 一本  
好 ▲貳等 貳千元 二本  
行況 ▲參等 五元 千本

支店 天津 上海  
電話南局 三、七五三 三、四三七  
振替口座大連參六七六番  
取次店 各所にあり

建築部、土木部 工事請負、設計、監督、鑑定、測量

商業部 各種建築材料、土地產物各種、石炭販賣其他一般輸出入

北京東單牌樓棲鳳樓

華勝公司

電話東局一七〇〇

支店所在地 天津日本租界壽街(電話二一三六)青島堺町(電話二九八)

出張所 濟南府商埠地大馬路

引受代理店 淺野セメント株式會社、日本ベイント會社、日本建築製

紙會社、楊家坨煤礦公司、大同生命保險株式會社、旭硝子株式會社(北京特約販賣)



北京東單牌樓三條胡同

△古河商事株式會社

北京出張員

電話東局一五〇〇號

北京東單新開路

泰平公司

電話東局一三〇〇號



北京東單牌樓根

# 信義洋行

店主 越智丈吉

電話東局(二〇六號)  
一三八號(店主專用)

衛生材料硝子器、化學工業藥品等、雜貨輸出入代辦

# 信昌洋行

行主 齋藤振一

振替口座大阪九六五四番

本店 霞公府西口外 (電話東局一三七號)  
分行 正陽門外大街 (電話南局八十七號)



大連市山縣通

福昌公司

相生山太郎

高等御旅館

扶桑館

北京東單牌樓大街  
電話東局一六三三號



いなかしつータツタに京北

るあ用信も而

# 佐野吳服店

北京東單西裱褙胡同

電話東局三三二番

西原の品は確だとは北京

天津の定評です

貴金屬美術細工所  
及販賣並時計各種  
寶石類其他翡翠賣買

天津日本租界壽街	西	原	金	店
天津日本租界曙街	西	原	出	店
店主	西	原	彦	治

北京には毎月一回出張します。羊肉胡同二葉内(東二〇三號)

(電二四二七號)



北京羊肉胡同

山東鐵道  
御指定 一 二 三 館

電話東局四六九

信義洋行雜貨部

加藤洋行

北京崇文門大街  
(電話東局一三號)

北京東單牌樓羊肉胡同

會席  
御料理  
長春亭

電話東局八十九號



會 席  
御 料 理



朝  
日  
軒

北京崇文門內溝沿頭

電話東局一二三號



505
56



505  
56

13.8. 7



終

